

生涯スポーツにおける地域社会と大学

— 地域社会と大学の密着と共存 —

三	浦	敏	弘
木	村	章	二
白	藤	一	郎
笈	田	欣	治

I はじめに

本報告は、関西大学文学部体育学教室の笈田欣治、木村章二、白藤一郎、三浦敏弘の4名が「1998年度関西大学・文学部共同研究制度」の適用を受けて、実施したものである。

われわれは、以前より健康教育に関心を持ち、大学生を対象に健康意識と体力の関係を主として健康意識調査と体力テストを用いて検討してきた。また、その成果は一部分「かんだい体育」に学生配布用教材として公開してきた。

これらの研究活動をとおして、われわれの研究関心は生涯スポーツへと広がり、一定の理論的検討をふまえたうえで、体力や健康の維持増進に寄与することが期待され、生涯スポーツへの参加導入が考えられる市民大学教養講座（保健・体育コース）が健康への気づき（健康認識）を明らかにすることで、地域と大学の関連を問う調査を実施した。

大学教育と生涯教育の関わりについては、生涯にわたる心身の健康保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツ振興の在り方について、保健体育審議会答申において、I. 生涯にわたる心身の健康に関する教育・学習の充実。II. スポーツと生涯にわたるスポーツライフの実現。III. 学校における体育・スポーツ及び健康に関する教育・管理の充実。IV. 家庭におけるスポーツ

及び健康学習の推奨。V. 地域社会におけるスポーツ及び健康学習の充実。VI. スポーツ健康推進会議等の設置。国の支援として、VII. 競技スポーツの振興。VIII. スポーツ医・科学及び健康科学の研究・活用の推進。IX. スポーツへの多様なかかわりの促進。など1996年12月10日文部大臣諮問を受け、①. 社会変化に対応した児童生徒等の健康の基礎づくりに関する施策の在り方。②. 生涯の各時期に応じてスポーツに親しむことができる条件整備の方策。③. 今後の我が国の国際競技力の向上方策。など三つの主な事項について1997年6月24日、中間まとめを関係団体の意見を聞き、審議を重ね具体的に公表されている。この答申では、生涯にわたる心身の保持増進のための幅広い範囲について多様な提言を行っている。国、都道府県、市町村といった行政機関をはじめ、スポーツ関係団体、健康教育関係団体、学校、家庭、企業などがこの桐蔭を踏まえて積極的に対応策を講じ、これにより国民が生涯にわたって健康で充実した生活を送り、明るく活力のある社会が形成されること。もちろんそのためには、適切な行財政措置が必要であることも盛り込まれている。また、そのような状況の中において大学体育・スポーツは、生涯にわたるスポーツ習慣を形成・定着させる視点に立ってスポーツの意義や価値を体感する経験を豊かに積み上げることのみならず、スポーツの科学的な研究や理論の構築と普及にも多大の成果をあげてきている。生涯スポーツ・競技スポーツにおいて指導的役割を果たす専門的人材を育成するなど、広く国民スポーツの質的充実に貢献している。国際競技力やプロスポーツへの貢献も見逃すことができないなど、大学における体育・スポーツは、我が国の体育・スポーツの振興に重要な役割を果たしている。

このように多大な貢献をみせている大学体育・スポーツは、高等教育の「大衆化」やスポーツに対する国民のニーズの高まり、生涯学習社会の進展、スポーツ科学・健康科学の発展の社会変化に対応する上からも21世紀においても一層充実される必要度の高いものである。大学においては、自らの教育理念・目的を明らかにし、より魅力ある大学とはどのようなものかという視点で、大学体育・スポーツの取り組みについて多様な創意工夫が重要となってきた。

そこには、近年の学生の多様化や学生を取り巻く環境の変化に対応し、学生相談体制の充実や学生の健康管理も含められ一層の充実が考えられている。

大学設置基準の改正など一連の大学改革の流れ中で、各大学は、真の大学教育の目指す人間教育、人間発達、人間形成とは如何なるものであるのか、大学教育を受けた人間の教養ある姿とは如何なるもののなかを深く、広く考えそれに対応する体育授業の創意工夫の積み重ねる必要が従来以上に生じてきている。その際、学生の心身の調和的発達を促し、心身の不調に対応できる体力の養成を図ること、健康やスポーツに関する科学的理論の裏付けられた運動実践を行えるようにすること、さらにスポーツの文化的価値である教養としてのスポーツ、文化としてのスポーツなどについての理解を図ることを通じて、学生にとって生涯にわたって心身ともに豊かな生活を送るための糧となるよう、学生の体系的認識や実践力を育てることの重要性が問われる¹⁾。

健康管理面に関しても生涯にわたって健康問題を主体的に解決していくためには、大学においても健康教育を充実するとともに学生の健康管理の充実を図っていくことが必要である。学生の心身の健康の保持増進を図ることを目的とする保健管理センター等の整備・充実を更に促進するとともに、教職員に対して心の健康問題などに関する意識の啓発するなど、大学の健康管理体制の充実を図ることが重要である。

大学のスポーツは、体育授業のほか、課外活動の一環として展開されている運動部活動や同好会・サークル活動という学生クラブによって担われている。これらは、学生のスポーツニーズにこたえとともに、自立心の涵養、仲間との交流の促進、クラブの運営能力の向上等の教育効果をもたらすものである。また、生涯スポーツの一実践者から初等中等教育の教員や社会体育・スポーツの指導者になる者に至るまで、将来の我が国の体育スポーツを様々な形で支え、発展させる人材や能力を育てることが期待されている。大学においては、魅力ある大学を実現する視点に立って、これらの大学スポーツの活性化を図る必要がある。このため今後、大学スポーツとしての組織的な振興を図るとともに、各大学においても、競技横断的なスポーツ支援組織を設けるなど、スポーツの

活性化のために積極的に取り組む必要がある。また、我が国のスポーツ医・科学の成果を競技水準の相当高い選手が比較的集まる大学スポーツにおいて反映させていくことも重要である。さらに、スポーツ部門における寄付講座を設けたり、企業との共同研究などスポーツにおける産学協同を積極的に推進する必要がある。また、同好会・サークル活動については、スポーツを多様化現象の一つととらえ、指導者、施設、運営に関して情報提供や相談に応じて一層の活性化を図ることが望まれる。

そこで重要なのは、スポーツ振興における大学の貢献である。大学体育・スポーツは、本来的には、当該大学に属する学生を対象としての教育であるが、魅力ある大学として評価されるためには、スポーツ分野における多様な社会的貢献が、大きく期待される。生涯スポーツ分野においては、「開かれた大学」の理念に立って、公開講座や講習会の開催等地域のスポーツクラブや一般住民への貢献が大きく期待される。とりわけ、理論的、実践的な力量を有している体育科教員の貢献、スポーツクラブ員によるスポーツボランティア活動等が、このような面で望まれるところである。さらには、各大学の状況によっては、大学施設を基盤とする学生と住民からなる新しいタイプの「総合型スポーツクラブ」などの構想も考えられる。また、大学等のスポーツ指導者養成を行う機関においては、今後、学校体育の教員のみならず、生涯スポーツの指導者の養成面でも貢献していくことが期待されている。このため生涯スポーツ指導者養成に、より重点を置く教育研究体制の整備が望まれており、その養成に当たっては、十分な人間性の涵養、各ライフステージの特性の理解と適切な対応能力、施設の管理運営能力等を養うための教育内容の充実が望まれる¹⁾。

以上のような状況認識のもとに『I』においては、本大学体育が地域に社会的に、「開かれた大学」理念に立って、健康面での公開講座、大阪府吹田市地域、一般住民への貢献という問題について取り上げ、地域と大学の密接な関係について検討した。とりわけ、理論的、実践的な力量を有している体育科教員と学生によるスポーツボランティア活動等が、地域住民にどのような影響を与えているのか。また、大学施設を基盤とし教員、学生と住民からなる新しいタイ

プの「調和的プログラム」などの構想を考慮にいれ、参加者の評価である調査結果を中心に検討する。『II』においては、研究の課題意識に係わる生涯スポーツに関連する補論である。我が国における生涯スポーツの展開プロセスや生涯スポーツ理念など基本的考え方を導き出すと共に、今後の生涯スポーツ振興の中心的フィールドとなる地域社会を基盤にした、前述に基づく大学と市行政と地域住民による学習評価に関する実証性を捕捉するものである。

1、地域社会と大学の密着

『開かれた大学』の実現

ー生涯教育に対する社会的要請の高まりー

乳幼児から老年にいたるまでの人間の発達や成熟過程に応じた教育の組織化が必要となる家庭教育、学校教育、社会教育の存在を統合化する必要性が生じてきた。社会教育として認識されていた国民の自主的社会教育活動は、急激に変化する社会の動向に対応しうる生涯教育として再評価され、実社会と遊離しがちな学校教育を社会に結びつけたものにする努力がなされてきた。1949年に制定された社会教育法は、社会教育に関する国および地方公共団体の任務を定めた法律であるが、この法に基づく行政を担当する文部省の社会教育局は、1988年に生涯学習局へと編成替えをしている。これにさきがけて、1981年に中央教育審議会は、国民が生涯を通じ学習し続ける社会の実現をめざす「生涯教育について」という答申を出し、さらに、1987年に臨時教育審議会が最終答申で「生涯学習体系への移行」という改革原則が示された。このように、生涯教育は日本の公教育政策の基本理念として位置付けられることとなった。1990年には、社会教育法とは別に生涯学習振興法（正式名称「生涯学習振興のための施策の推進体制等の整備に関する法律」）を制定し、生涯教育の基盤整備の推進をはかりつつある。

このような社会的背景のもと、生涯教育に対する社会の要求が高まり、大学を中心とした研究・教育機関の開放が望まれる状況が生じてきた。大学の解放講座である公開講座の開設は、1873年のイギリスのケンブリッジ大学が最初と

されている²⁾。当時の社会的背景として、産業革命による市民の文化的要求が高かった状況が考えられ、その要請に応えるための大学の講座の解放であった。日本においても、生涯教育に対する社会的要請の高まりを受ける形で、公開講座の重要性が社会的にも認識されるようになってきた。1987年に臨時教育審議会が最終答申で示された、生涯学習の拠点としての学校などの施設有効活用 of 手段としてのインテリジェント・スクールなどは、まさしくその基盤整備としてあらわれたものであろう。

2、吹田市民大学教養講座に達するまでの経緯

『吹田市民大学教養講座』以前にも、大学所属の各研究所が中心となって、「関西大学史学講演会（文学部史学会共催）」（1955年～1964年）、「泊園記念講座（東西学術研究所・泊園記念会主催）」（1961年～）、「産業セミナー（経済・政治研究所主催）」（1962年～）などの講座が、昭和30年代から開催されている。このような歴史的背景を持続させつつ、開かれた大学の実現を念頭においた、公開講座をより発展的に考えている。

大学の研究成果を地域社会に還元する事と、市民との交流を図る目的で開設された本学初の講座は、「吹田市民大学教養講座」であった。第1回講座は、「現代社会における家庭と教育」を主な題目に1972年9月20日から開催された。教育学科の教員によるこの講座は、希望者定員をオーバーする好評状態のため翌年には、2コースを設け定員を増加したが、受付1時間後には定員に達するほどであった。こうした人気に応じて従来、吹田市中央公民館と吹田市教育委員会が主催し大学は講師派遣等で協力していたが、第3回からはこの講座を本学との共催としている。そして、従来行われていた「教育の部」に「文学の部」を加え、千里ニュータウンの南センタービルと吹田市民会館の二カ所で開催するようになった。その後、この講座は年々盛んになり、規模も拡大していく。1976年からは、「経済の部」。1978年からは「法律の部」と「社会の部」。1979年からは、「日本史の部」。1978年からは、春季と秋季に分け開設され、1980年からは春秋4講座づつとなる。1981年からは、「工学の部」。さらにその翌年、

1982年からは「体育のコース」を設け全学的に取り組むようになっていった。また、吹田市以外の本学周辺の各種団体と提携した市民大学的な講座も次々と開設され、その輪は広がりを見せる。1982年「文化セミナー《大阪論》」（大阪府立文化情報センターと共催）、「寝屋川市民大学」（寝屋川市、寝屋川市教育委員会と共催）、1983年「あこう市民大学講座」（赤穂市教育委員会と共催）などが、開催されている。

こうした講座以外にも「関西大学文化講演会」（1973年、7月14日、名古屋BBCホール）（同年、8月21日、松山・愛媛県医師会医学研修所）、（同年、8月25日、高松・四国新聞社大ホール）、1982年「シルクロード公開講座」（1982年、11月9日、箕面市立箕面文化センター）、箕面市民のつどい「外国から見た日本の家庭文化」（1982年、11月30日、箕面市立中学校）、八日市市講演会「家庭教育・性教育を考える親のつどい」（1982年、12月8日、八日市市立船岡中学校）、香川県大百科事典編集記念文化講演会（1983年7月30日、高松・四国新聞社大ホール）（同年、8月10日、丸亀・丸亀市総合会館）（同年、10月8日、善通寺・善通寺市民会館）、「シルクロード」講演会（1983年12月10日、59年1月14日、2月18日、3月10日、東大阪市社会教育センター）、「海のシルクロードと日本」（1984年5月14日、大阪府立文化情報センター）、「シルクロードとガンダーラ」（1984年10月12日、尼崎市総合文化センター）、「歴史と文学の間」（1985年11月23日、29日、12月9日、13日、尼崎市立図書館集会室）などの講演会を開き講座以外にも開かれた大学を目指し、一般市民の啓蒙と地域社会との交流に務めている。さらに、1967年から1981年3月まで「今晚はみなさん」というラジオ講座（ラジオ関西）を開設している。親しみやすい話題内容を1人の教員が、一ヶ月、月曜日から土曜日まで毎日5分、テーマを変えて自由に話すものである。一般学生を含めた社会人にまでも好評であった。

3、吹田市民大学教養講座（保健・体育コース）に関する調査研究

－1996年、1997年、1998年の3年間の講座参加者動向から－

1972年と1973年に第1回、第2回の文学部教育学科を中心として開講された「教育の部」講座は、吹田市中央公民館と吹田市教育委員会が主催したものであり、関西大学は講師派遣等で協力するという形式がとられた。1974年の第3回から関西大学が共催という形式で積極的に参加するようになり、「文学の部」の講座を加えて実施された。1976年の第5回から「経済の部」、1978年の第7回から「法律の部」と「社会の部」、1979年の第8回から「日本史の部」（1980年より「歴史・地理の部」に発展）、1981年第10回から「工学の部」を設けて規模の拡大化がなされてきた。保健・体育関係者と「吹田市民大学教養講座」との関わりは、1982年第11回から「体育の部」を設けて「健康・教育・文化」のテーマに取り組んだときからであり、1999年ですでに28回の歴史をもっている。

ここでは、吹田市民大学教養講座「保健・体育コース」を中心とした講座（健康教育）を取り上げる。最近の参加者動向を認識するため、1996年、1997年、1998年の3年間の講座を対象とし、検討を加えた。

①調査方法

「吹田市民大学教養講座」参加者に講座最終日にアンケート用紙を配布し、記入後回収するという方法がとられた。回収率は、1996年は度工学に関する講座55.7%、保健体育に関する講座52.9%、文学に関する講座51.1%、歴史に関する講座44.3%であった。1997年度の回収率は、工学に関する講座54.8%、保健体育に関する講座55.1%、文学に関する講座57.0%、歴史に関する講座47.5%であった。1998年度の回収率は、工学に関する講座65.4%、保健体育に関する講座58.5%、歴史に関する講座54.5%、社会に関する講座56.6%であった。

②. 結果と考察

1. 「吹田市民大学教養講座」保健・体育コースの開講内容については、秋期講座の第2コースとして開催されている。1996年の講座のテーマは、『《元氣》を創造する生活の知恵』であった。5回の講義形式で開講された内容は、1回

目『「いきいき人生」の創造 ー体力の面から考えるー（文学部教授：末吉崇暁）』、2回目『自己発見のための健康診断 ー成人病の予防策としてー（保健管理センター医師：井上澄江）』、3回目『中高年のための運動法 ー具体的な処方を中心にー（文学部教授：武智英裕）』、4回目『心臓と上手につきあう方法 ー心臓病とスポーツー（保健管理センター医師：和久幸子）』、5回目『リズム感覚と健康の創造 ー若さを保つためにー（文学部教授：田村典子）』であり、定員200名に対して280名の参加があった。この年度の講座は、従来通りの講義形式の講座であった。1997年のテーマは、『「生きる力」の開発を考える』であり、2回の実技を含む形式で開講された。その内容は、1回目『「生きる力」の開発と身体運動 ー鍵っ子・カウチポテト・たまごっちー（文学部教授：伴 義孝）』、2回目『健やかに年齢を重ねる（保健管理センター医師：井上澄江）』、3回目『スポーツ練習法の知恵に学ぶ（実技） ーボール運動で心身の若さを試そうー（文学部教授：木村章二）』、4回目『心臓と上手につきあう方法（その2） ー高血圧症についてー（保健管理センター医師：和久幸子）』、5回目『基本運動「歩く・走る」と健康開発（実技） ー元気を保つためにー（文学部教授：青木積之介）』であり、定員200名に対して245名の参加があった。この年度の特徴は、参加者から要望の多かった実技指導を導入したことであり、その参加者の反応分析は、今後の「吹田市民大学教養講座」保健・体育コースの在り方に、重要な方向性を持たせることとなる。

1998年のテーマは『「生活習慣病」を問う』であり、その内容は、1回目『いま、なぜ、「生活習慣病」なのか ーその対策を考えるー（文学部教授：川本武之）』、2回目『自己発見のための健康診断 ー検査値の見方と対応策ー（保健管理センター医師：井上澄江）』、3回目『誰にでもできる健康開発（実技） ーボール運動を楽しもう・丸いボールー（文学部教授：笈田欣治）』、4回目『誰にでもできる健康開発（実技） ーボール運動を楽しもう・楕円のボールー（文学部教授：溝畑寛治）』、5回目『心臓と上手につきあう方法（その3） ー不正脈についてー（保健管理センター医師：和久幸子）』であり、2回の実技講座を含み、定員200名に対して208名の参加があった。この年度の特徴と

表1-1. 吹田市市民大学教養講座一覧 ※1982年～1999年・第11回～第28回（秋期）
【保健・体育コース】全体テーマ・個別テーマ・講師

身 体 運 動 と 生 活			場所：千里市民センター
一九八二年 第11回	1	健康美を考える ージャズ体操の求めるところー	文学部教授 武 智 英 裕
	2	現代っ子の生活と体力づくり	文学部教授 末 吉 崇 暁
	3	青少年のからだとしん ー現代生活の歪から起こる諸問題とその打開ー	文学部教授 平 原 豊 弘
	4	中高年の体力づくりとジュギング	文学部教授 青 木 積之介
	5	親と子の健康	文学部教授 川 本 武 之
	6	市民生活と安全	文学部教授 島 田 三千男
	7	随意運動の日本人論 ー人間は動かないと育たないー	文学部教授 伴 義 孝

表1-2.

親 と 子 の 健 康 づ く り			場所：千里市民センター
一九八三年 第12回	1	家族でつくる心の健康	保健管理センター所長代理 立 石 芳 雄
	2	親と子の体力づくり (その1) ーふれあい運動ー	文学部教授 川 本 武 之
	3	親と子の体力づくり (その2) ー音楽体操とストレッチ運動ー	文学部教授 末 吉 崇 暁
	4	みんなのエアロビクス運動 (その1) ージャズ体操ー	文学部教授 武 智 英 裕
	5	みんなのエアロビクス運動 (その2) ージョギングー	文学部教授 青 木 積之介
	6	受験生の生活とからだの問題 ー体力からみた健康問題ー	文学部教授 平 原 豊 弘
	7	受験期の親と子の健康問題	保健管理センター所長 大 川 治

して、開講の会場を関西大学キャンパスに変更することとなり、大学の施設を開放することへの教育効果が問われることとなる。

表1-1～18. は、開催テーマを年度ごとに示したものである。保健・体育

表1-3.

からだところの健康生活		場所：千里市民センター
一九八四年 第13回	1 未来社会と健康生活	文学部教授 伴 義 孝
	2 遊びと健康生活（1） －リズム遊戯を中心に－	文学部教授 田 村 典 子
	3 遊びと健康生活（2） －ボール遊戯を中心に－	文学部教授 笈 田 欣 治
	4 遊びと健康生活（3） －安全能力を育てる－	文学部教授 溝 畑 寛 治
	5 遊びと健康生活（4） －生活とレクリエーション－	文学部教授 川 本 武 之
	6 精神衛生 －心の栄養としての「甘え」－	保健管理センター所長代理 立 石 芳 雄
	7 心身症について	保健管理センター所長 大 川 治

表1-4.

中高年の健康づくり		場所：千里市民センター
一九八五年 第14回	1 日常生活における姿勢と健康について	文学部教授 溝 畑 寛 治
	2 スポーツの生活化	文学部教授 笈 田 欣 治
	3 成人病とのつきあい	大阪医科大学助教授 林 泰 三
	4 老人の精神衛生 －主として痴呆の予防について－	藍野花園病院院長 津 田 清 重
	5 老化を防ぐ健康スポーツ	文学部教授 末 吉 崇 暁
	6 健康づくりのための運動の進め方 －どんな運動をどんなふうによれあよいか－	文学部教授 武 智 英 裕
	7 身体運動と生命 －サバイバル時代を考える－	文学部教授 伴 義 孝

関係者が常に時代に先駆けて考えてきたテーマは、「生きる」を中心に運動や健康の在り方を、日常生活に反映できるようにと考慮されたものである。特に最近の「吹田市民大学教養講座」においては、1997年からは参加者から要望の

表1-5.

中高年のこころとからだ			場所：千里市民センター
一九八六年 第15回	1	こころの健康 －男と女－	保健管理センター所長代理 立石 芳雄
	2	中高年女性の身体特性と運動	文学部教授 末吉 崇暁
	3	中高年女性のからだについて －女性のからだと現代病－	文学部教授 田村 典子
	4	余暇時代のレクリエーション活動	文学部教授 川本 武之
	5	中高年の健康づくり運動法	文学部教授 武智 英裕
	6	「歩行」運動と心身のストレス	文学部教授 伴 義孝
	7	ライフサイクルと心の悩み －ヒューマンサイエンスの立場から－	保健管理センター所長 飯田 紀彦

表1-6.

人の一生と心身の健康			場所：千里市民センター
一九八七年 第16回	1	子どもから高齢者までの体力管理法 －白い筋肉と赤い筋肉のはなし－	文学部教授 伴 義孝
	2	こころの健康 －実年を生きる－	保健管理センター所長代理 立石 芳雄
	3	中高年のこころの健康 －ストレスの付き合い－	文学部教授 平原 豊弘
	4	ジョギングの功罪 －ジョギング発祥の地オレゴンを訪ねて－	文学部教授 青木 積之介
	5	中年からの健康・体力づくり －中年はどのように運動したらよいか－	文学部教授 武智 英裕
	6	スポーツと健康 －スポーツが心身におよぼす影響－	文学部教授 末吉 崇暁
	7	高齢者の健康	保健管理センター所長 飯田 紀彦

多かった実技指導を導入、1998年開講会場を関西大学キャンパスに変更し、参加者の反応を検討しながら講座の内容を考えるという単なる講座から質の高い体育の改革期へと移行が行われている。

表1-7.

からだところの健康管理			場所：千里市民センター
一九八八年 第17回	1	中高年にとっての運動の効果とはなにか	文学部教授 武 智 英 裕
	2	心の健康 ー都市を生きるー	保健管理センター所長代理 立 石 芳 雄
	3	健康づくりはジョギングかウォーキングか	文学部教授 青 木 積之介
	4	健康を創る	保健管理センター所長 飯 田 紀 彦
	5	現代養成訓・貝原益軒思想を読む ーはじめに身体運動ありきー	文学部教授 伴 義 孝

表1-8.

暮 ら し と 健 康 開 発			場所：千里市民センター
一九八九年 第18回	1	健康を創る ーパートIIー	保健管理センター所長 飯 田 紀 彦
	2	中高年の健康と体力 ー日常生活における健康管理と体力づくりの実際ー	文学部教授 平 原 豊 弘
	3	身体トレーニングと健康	文学部教授 溝 畑 寛 治
	4	中高年を生きる ー世界ベテランズ陸上競技大会に参加してー	文学部教授 青 木 積之介
	5	中高年の体力を考える ー健康づくりのためのアプローチー	文学部教授 武 智 英 裕

表1-9.

明日の健康・今日の健康			場所：千里市民センター
一九九〇年 第19回	1	加齢とからだづくり ー好ましい運動の条件ー	文学部教授 武 智 英 裕
	2	こころとからだのリフレッシュ ーストレスと運動・スポーツー	文学部教授 平 原 豊 弘
	3	ランニングの科学 ージョガーからレーサーまでー	文学部教授 青 木 積之介
	4	市民生活と健康志向	文学部教授 川 本 武 之
	5	食文化と健康 ー食物嗜好物ー	保健管理センター所長 飯 田 紀 彦

表1-10.

私の健康・みんなの健康			場所：千里市民センター
一九九一年 第20回	1	運動と健康 －体力づくりから健康づくりへ－	文学部教授 武 智 英 裕
	2	余暇とスポーツ・レクリエーション －アメリカコロラド州を中心に－	文学部教授 末 吉 崇 暁
	3	健康づくりと生涯スポーツ	文学部教授 青 木 積之介
	4	健康管理について	保健管理センター医師 井 上 澄 江
	5	「働く身体」の話 －どこかおかしい現代日本人の生活－	文学部教授 伴 義 孝

表1-11.

今、健康づくり・体力づくり			場所：千里市民センター
一九九二年 第21回	1	中・高年の底力	文学部教授 武 智 英 裕
	2	中・高年の運動とスポーツ －今あなたは何をすべきか－	文学部教授 青 木 積之介
	3	働く身体の知恵	文学部教授 伴 義 孝
	4	生活習慣と健康 －成人病予防のために－	保健管理センター医師 井 上 澄 江
	5	こころの健康	保健管理センター所長 社会学部教授 飯 田 紀 彦

表1-12.

心身からみた生きがい			場所：千里市民センター
一九九三年 第22回	1	運動のもたらす精神的効果	文学部教授 武 智 英 裕
	2	人間はなぜ走るのか	文学部教授 青 木 積之介
	3	余暇活動と生きがい	文学部教授 末 吉 崇 暁
	4	成人病の予防 －動脈硬化を中心に－	保健管理センター医師 井 上 澄 江
	5	心の健康（パートII）	保健管理センター所長 社会学部教授 飯 田 紀 彦

表1-13.

より豊かな人生と健康・スポーツ			場所：千里市民センター
一九九四年 第23回	1	成人病と男女差	保健管理センター医師 井上 澄江
	2	スポーツのよこび －行うスポーツから観るスポーツへ－	文学部教授 笈田 欣治
	3	スポーツは体にとってプラスかマイナス	文学部教授 青木 積之介
	4	心の健康 III	社会学部教授 保健管理センター所長 飯田 紀彦
	5	平素の健康を考える	文学部教授 武智 英裕

表1-14.

「健康・スポーツ・体力」のアラカルト			場所：千里市民センター3階大ホール
一九九五年 第24回	1	「2本足の動物」のはなし	文学部教授 伴 義孝
	2	スポーツと健康 －有酸素運動の科学－	文学部教授 平原 豊弘
	3	健康診断 －受診は必要、フォローも重要－	保健管理センター医師 井上 澄江
	4	マラソンと日本人	文学部教授 青木 積之介
	5	心の健康（パートIV）	保健管理センター所長 社会学部教授 飯田 紀彦

表1-15.

より豊かな人生と健康・スポーツ			場所：千里市民センター
一九九六年 第25回	1	「いきいき人生」の創造 －体力の面から考える－	文学部教授 末吉 崇暁
	2	自己発見のための健康診断 －成人病の予防策として－	保健管理センター医師 井上 澄江
	3	中高年者のための運動法 －具体的な処方を中心に－	文学部教授 武智 英裕
	4	心臓と上手につきあう方法 －心臓病とスポーツ－	保健管理センター医師 和久 幸子
	5	リズム感覚と健康の創造 －若さを保つために－	文学部教授 田村 典子

表1-16.

生きる力」の開発を考える 場所：新関西大学会館北棟・第2体育館・第4グラウンド			
一九九七年 第26回	1	「生きる力」の開発と身体運動 ー鍵っ子・カウチポテト・たまごっちー	文学部教授 伴 義 孝
	2	健やかに年齢を重ねる	保健管理センター医師 井 上 澄 江
	3	スポーツ練習法の知恵に学ぶ ーボール運動で心身の若さを試そうー〔実技を含む〕	文学部教授 木 村 章 二
	4	心臓と上手につきあう方法（その2） ー高血圧症についてー	保健管理センター医師 和 久 幸 子
	5	基本運動「歩く・走る」と健康開発 ー元気を保つためにー〔実技を含む〕	文学部教授 青 木 積之介

表1-17.

『生活習慣病』を問う			場所：新関西大学会館北棟・第2体育館
一九九八年 第27回	1	いま、なぜ、『生活習慣病』なのか －その対策を考える－	文学部教授 川 本 武 之
	2	自己発見のための健康診断 －検査値の見方と対応－	保健管理センター医師 井 上 澄 江
	3	誰にでもできる健康開発 －ボール運動を楽しもう・丸いボール－〔実技を含む〕	文学部教授 笈 田 欣 治
	4	誰にでもできる健康開発 －ボール運動を楽しもう・楕円のボール－〔実技を含む〕	文学部教授 溝 畑 寛 治
	5	心臓と上手につきあう方法（その3） －不整脈について－	保健管理センター医師 和 久 幸 子

表1-18.

『「こころ」と「からだ」の養成』			場所：新関西大学会館北棟・第2体育館
一九九九年 第28回	1	武道とこころ	文学部教授 白 藤 一 郎
	2	豊かな老い	保健管理センター医師 井 上 澄 江
	3	健康とスポーツの科学	文学部助教授 雑 古 哲 夫
	4	心臓と上手につきあう法（その4） ー心筋梗塞と狭心症ー	保健管理センター医師 和 久 幸 子
	5	中国最古の健身術〔実技を含む〕 ー馬王堆導引図44動作から学ぶー	文学部教授 岩 田 家 正

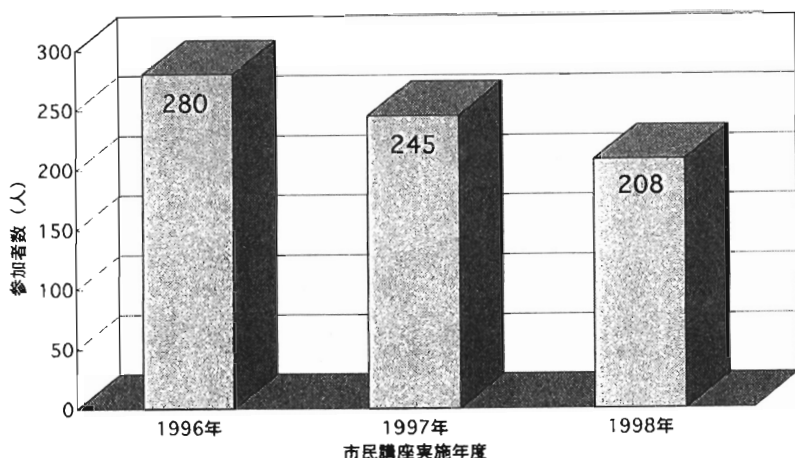


図1. 参加者数の変化

1. 参加者数の変動について

「吹田市民大学教養講座」の保健・体育コースへの参加人数は、1996年度280人、1997年度245人、1998年度208人であり、その平均は244.3人、標準偏差は36.0人であり、3年間を比較すると年度を経るごとに減少する傾向にある（図1）。また、秋期の全4講座の総合参加者数は、1996年1025人、1997年1021人、1998年779人と変動しており、1998年度の減少が大きいことが認められる。しかし、各講座の募集人数は各200人となっており、4講座の募集人数の合計は800人であるとすれば、ほぼ募集人数の目標数は確保していると考えられる。

2. 参加者の男女比について

保健・体育コースで開講された1996年から1998年の講座への参加者男女変化を図2.に示した。1996年度は男子44.3%、女子55.7%、1997年度は男子44.1%、女子55.9%、1998年は男子48.1%、女子51.9%となり、3年間の平均

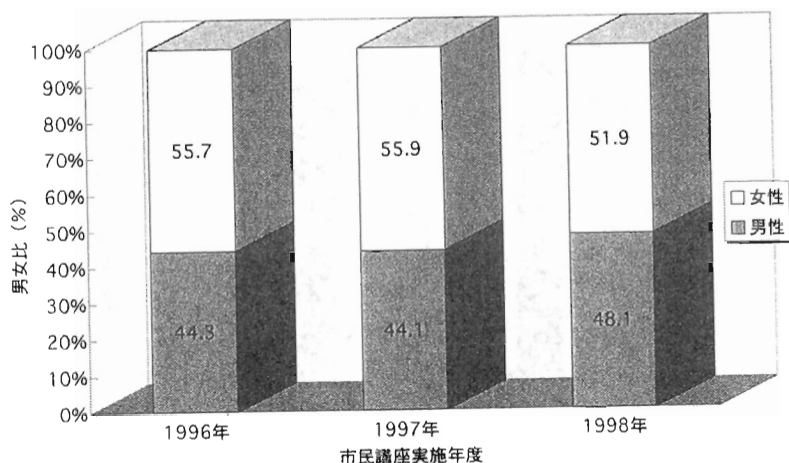


図2. 参加者の男女比

は男子 $45.5 \pm 2.3\%$ 、女子 $54.5 \pm 2.3\%$ とわずかに女子が多い傾向が認められた。

3. 出席率の変動について

保健・体育コースで開講された5回の講座への参加率の変化を図3.に示した。1996年1回目の講座への参加率は75.7%，2回目の講座への参加率は71.1%，3回目の講座への参加率は68.6%，4回目の講座への参加率は63.6%，5回目の講座への参加率は63.2%であった。同様に1997年の参加率は、それぞれ1回目75.1%，2回目72.7%，3回目58.4%，4回目63.7%，5回目52.7%であった。1998年は、1回目78.4%，2回目66.8%，3回目54.8%，4回目42.3%，5回目58.7%であった。3年間の平均値は、それぞれ1回目 $76.4 \pm 1.7\%$ ，2回目 $70.2 \pm 3.0\%$ ，3回目 $60.6 \pm 7.1\%$ ，4回目 $56.5 \pm 12.3\%$ ，5回目 $58.2 \pm 5.3\%$ であった。初回の参加からすでに四分の一が欠席をすることが示され、4回目までは回を重ねる毎に参加者数が減少する傾向にあり、4回目と5回目はほぼ同数を維持することが認められた。また、延人数でみた場合の

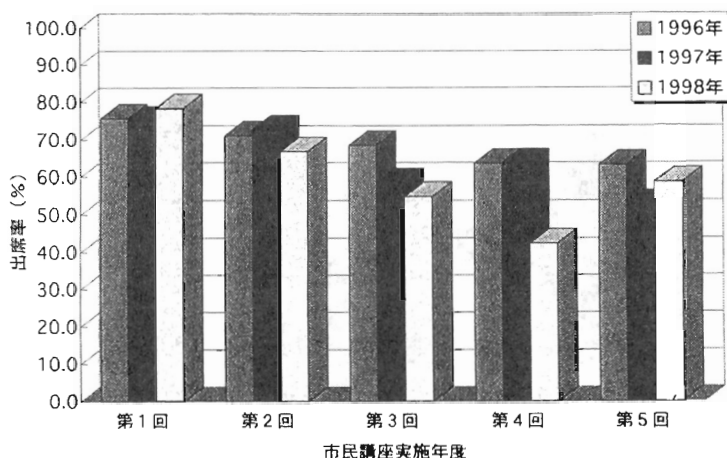


図3. 5回の講座への出席率の変化

各年度の参加率は、1996年68.4%，1997年64.5%，1998年60.2%となり，参加者数と同じように参加率も減少傾向にあることが示された。

4. 講座5回の出席回数について

各個人が5回の講座へ何度出席したかを示したものが図4である。1996年の個人出席状況は、5回全部出席した者37.5%，4回出席した者22.9%，3回出席した者12.5%，2回出席した者8.6%，1回出席した者8.6%，一度も出席しなかった者10.0%であった。1997年は、5回全部出席した者33.9%，4回出席した者21.6%，3回出席した者14.3%，2回出席した者7.3%，1回出席した者9.0%，一度も出席しなかった者13.9%であった。1998年は、5回全部出席した者26.4%，4回出席した者18.8%，3回出席した者17.8%，2回出席した者13.0%，1回出席した者14.4%，一度も出席しなかった者9.6%であった。3年間の平均値を計算すると、それぞれ5回全部出席した者 $32.6 \pm 5.6\%$ ，4回出席した者 $21.1 \pm 2.1\%$ ，3回出席した者 $14.9 \pm 2.7\%$ ，2回出席した者9.6

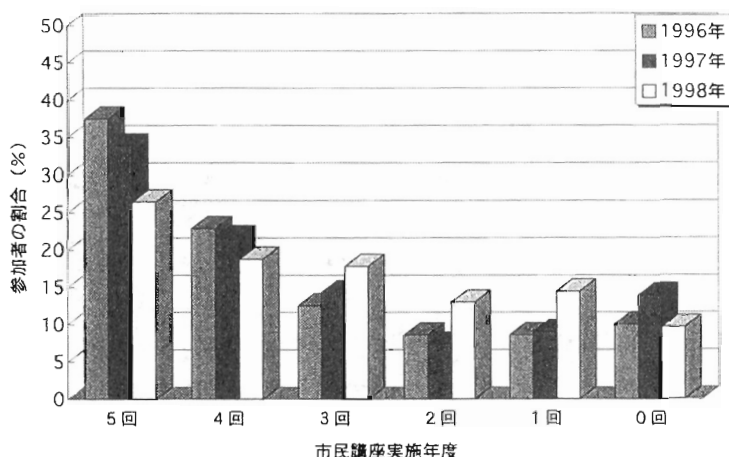


図4. 市民講座への参加回数の比較

±3.0%, 1回出席した者10.7±3.3%, 一度も出席しなかった者11.2±2.4%であった。参加申込をしても約1割が一度も出席をしないことが示された。

5. 講座参加者の住居地比較について

吹田市内および吹田市外からの参加者の比率を示したものが図5.である。1996年度は吹田市内98.9%, 吹田市外1.1%, 1997年度は市内93.1%, 市外6.9%, 1998年は市内93.3%, 市外6.7%となり, 3年間の平均は市内95.1±3.3%, 市外4.9±3.3%となり, 多くは吹田市内からの参加者であることが示された。図6.は, 市民講座参加者の居住地別の割合を示したものである。ニュートン地域からの参加者は平均すると24.7±2.1%となり, 全参加者の4分の1を占めていることが認められた。続いて, 千里山・佐井寺地域の16.5±1.3%, 山田・千里丘地域の13.2%±4.0%, 片山・岸部地域の11.6±4.1%, J R以南地域の9.7±2.4%, 豊津・南吹田地域の9.0±2.4%となることが示された。

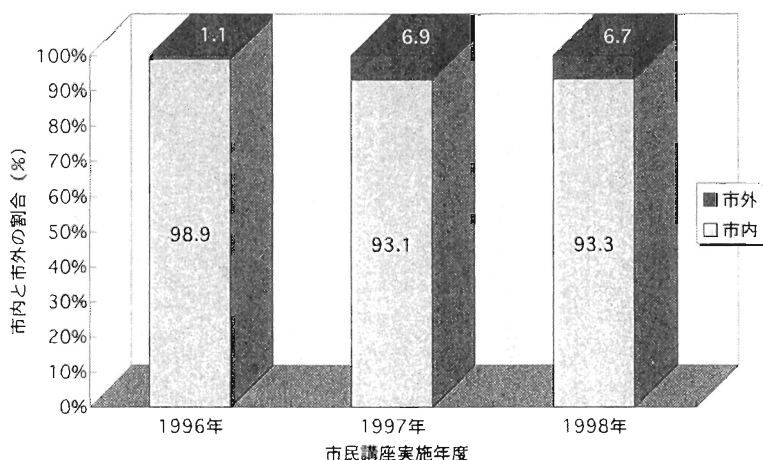


図5. 市内・市外からの参加者の比較

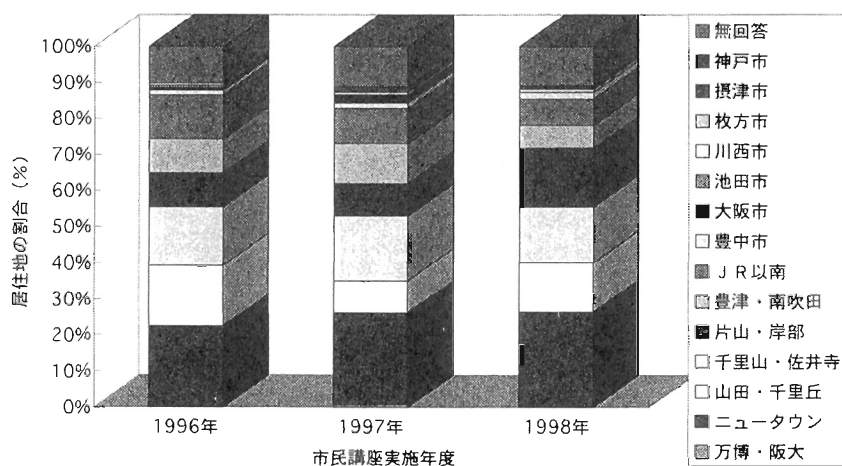


図6. 参加者の居住地比較

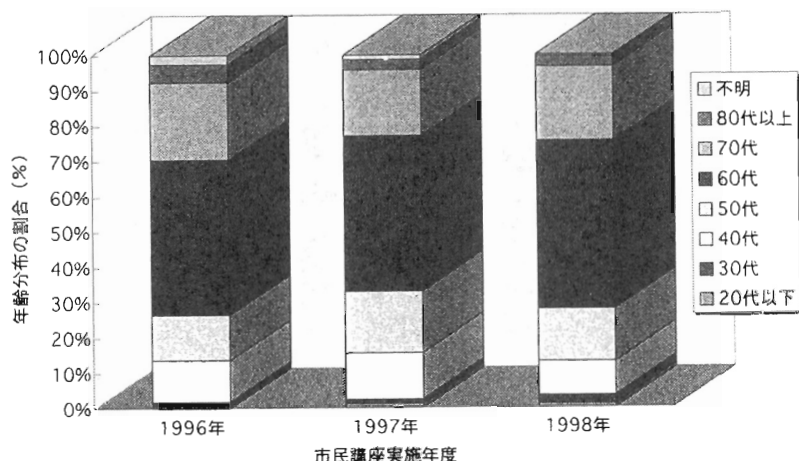


図7. 受講者の年齢別分布

6. 講座参加者の年齢別比率について

受講者の年齢別の割合を図7.に示した。各年度ともほぼ同様の分布を示している。その平均値は、それぞれ20代以下 $1.0 \pm 0.3\%$ 、30代 $1.6 \pm 0.7\%$ 、40代 $11.5 \pm 1.7\%$ 、50代 $15.1 \pm 2.4\%$ 、60代 $45.2 \pm 2.1\%$ 、70代 $20.7 \pm 1.7\%$ 、80代以上 $3.6 \pm 1.2\%$ となっている。60代の受講者の割合が大きく、70代、50代と続いていることが示された。図8.および図9.は、受講者の年齢別の割合を男女別に示したものである。男子の平均値は、それぞれ20代以下 $0.3 \pm 0.5\%$ 、30代 $0.6 \pm 0.6\%$ 、40代 $1.5 \pm 0.4\%$ 、50代 $2.5 \pm 0.7\%$ 、60代 $57.3 \pm 4.9\%$ 、70代 $29.8 \pm 2.5\%$ 、80代以上 $6.1 \pm 3.1\%$ となっている。また、女子の平均値は、それぞれ20代以下 $1.6 \pm 0.8\%$ 、30代 $2.4 \pm 1.2\%$ 、40代 $19.8 \pm 2.2\%$ 、50代 $25.6 \pm 3.7\%$ 、60代 $35.1 \pm 3.3\%$ 、70代 $13.1 \pm 1.5\%$ 、80代以上 $1.5 \pm 0.3\%$ となっている。男子の特徴として、60代が約60%、70代が30%を占めており、他の年齢層が極端に減少する傾向が認められた。女子は40代、50代、60代、70代とかなり幅広い年齢層に参加者が分布することが示された。

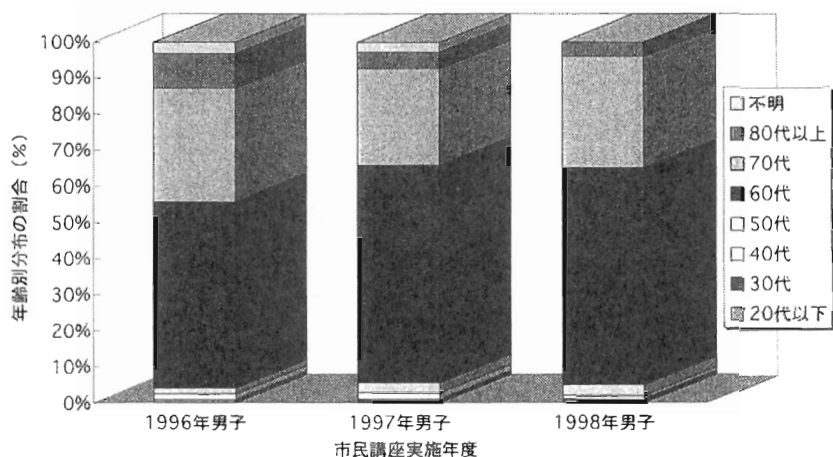


図 8. 男子受講生の年齢別分布

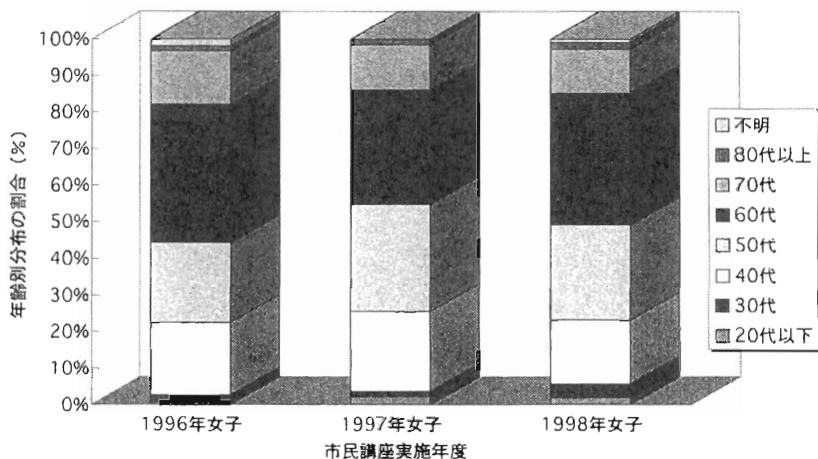


図 9. 女子受講生の年齢別分布

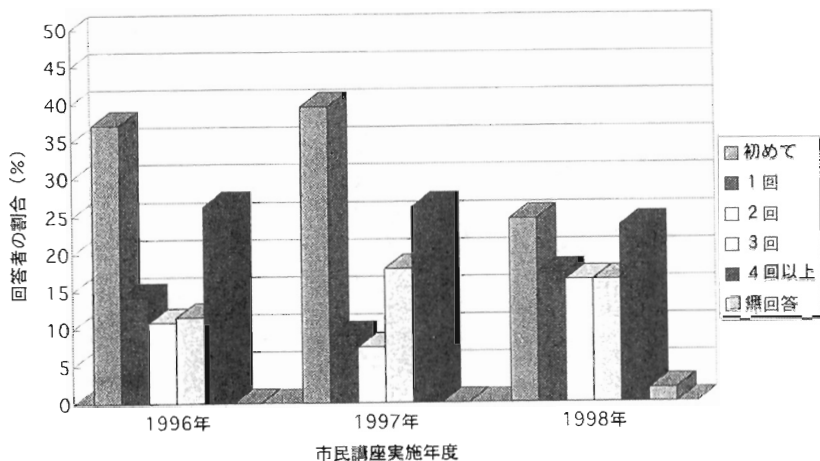


図10. 講座への参加回数比較

7. 講座への参加回数の比較について

図10. は、これまでの参加回数について示したものである。1996年度と1997年度は、初めての参加者と4回以上のリピーターの割合が多いことが認められるが、1998年度は、初めて、1回、2回、3回、4回以上の割合が均一に分布してきた傾向が示された。

8. 保健体育コース参加者の他講座コースへの参加状況について

図11. は、同時に受講した他のコースの受講率について示したものである。工学、歴史、社会の各分野にほぼ均等に分布する傾向が示されたが、各年度の3コースの平均は、1996年度 $37.0 \pm 9.3\%$ 、1997年度 27.1 ± 3.7 、1998年度 25.2 ± 3.4 となっており、開講年度が新しくなるに連れて、他の分野を同時に受講する参加者の割合が減少していることが認められた。

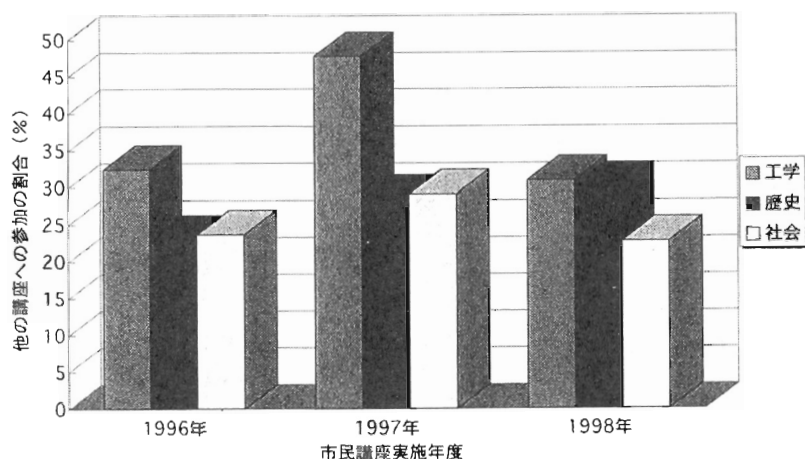


図11. 保健体育コース参加者の他講座への受講率

9. 保健体育コースへの参加動機について

図12. は、保健体育コースを受講した参加者の参加動機について示したものである。「以前から関心があった分野」と回答し、ほぼ6割を占めることが認められる。「知らない分野なので新しい知識を得るため」が45%を占めた。1997年度のテーマは『生きる力の開発を考える』であり、昨今注目を集めている『生きる力』についての先駆的働きかけができたことを示している。「職業上、家庭生活上必要」という考え方で参加する人が1997年度と1998年度に認められないことについては、今後のテーマ設定において考慮すべきことであると考えられる。

10. 吹田市民大学教養講座参加者変動と保健体育コース参加者変動比較について

図13は、吹田市民大学教養講座の情報入手方法について示したものである。1996年当時は、「市報すいた」からの情報入手が唯一の方法である傾向をみせているが、徐々に「市報すいた」の割合が減少していく傾向が認められる。図

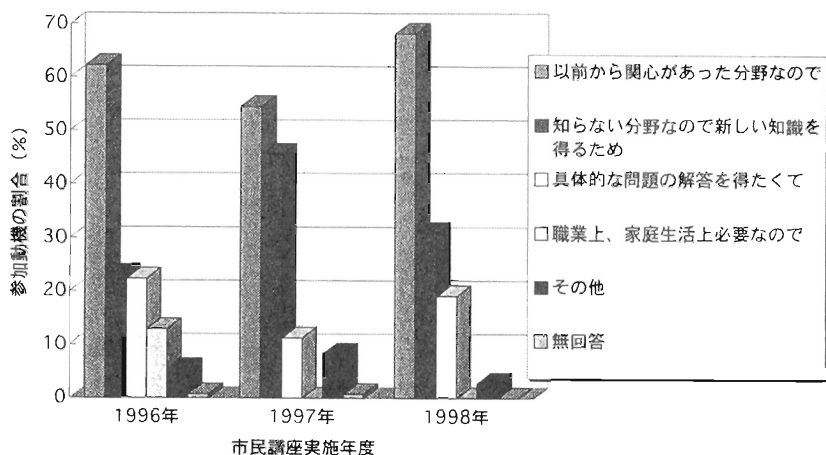


図12. 保健体育コースへの参加動機

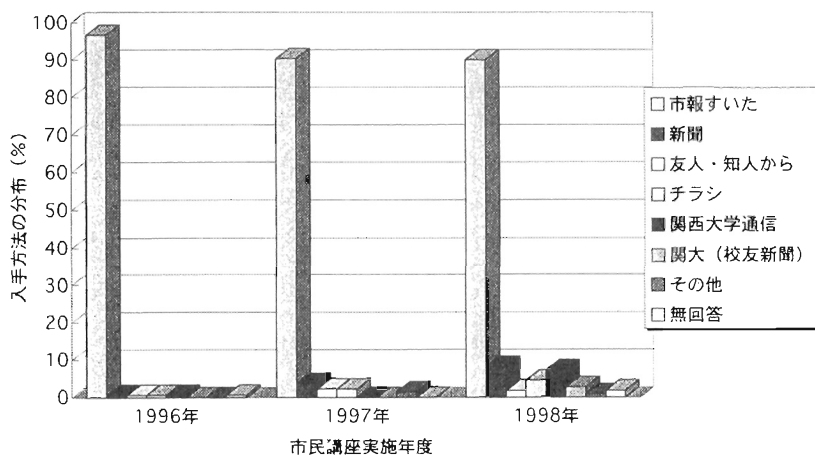


図13. 市民講座の情報入手方法

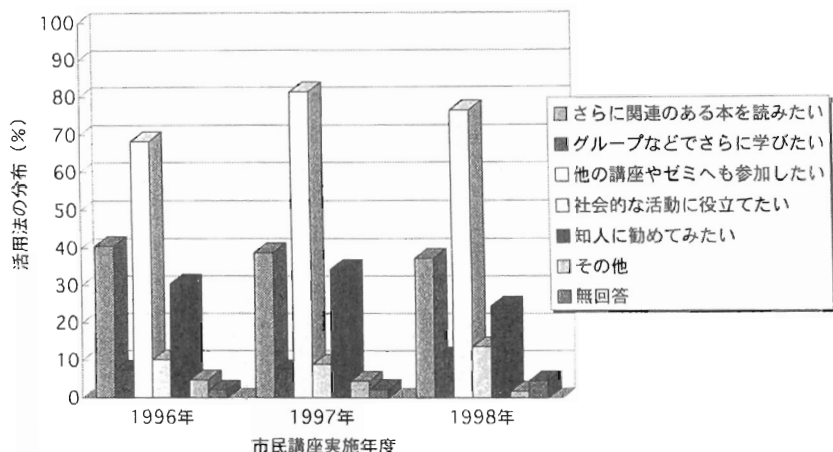


図14. 受講後の今後の活用法

14. は、吹田市民大学教養講座受講後の活用法について示したものである。「他の講座やゼミへも参加したい」との希望が4分の3認められ、意欲的な参加を促すきっかけになっていることが示された。また、「さらに関連のある本を読みたい」との希望も40%近い割合で回答されており、より深い知識への欲求が高まっていることが推測される。

図15. は、吹田市民大学教養講座参加者が講座の内容を評価したものを示したものである。「ちょうどよかった」が8割を占めており、ほぼ満足する講座を提供できたものと推定できる。図16. は、全講座の参加者合計の変動を示す。図17. は、保健体育講座参加者数変動を示した。また、図18. は全講座のコース別参加者数の変動を示した。工学の部に関する講座への参加者数は、1996年185人、1997年237人、1998年144人となり、その平均は 188.7 ± 46.6 人であった。テーマ設定により、参加者の増減が明確に現れる分野だけに、テーマ設定の難しさが伺える。歴史の部に関する講座への参加者数は、1996年280人、1997年259人、1998年302人となり、その平均は 280.3 ± 21.5 人であった。募集人数を

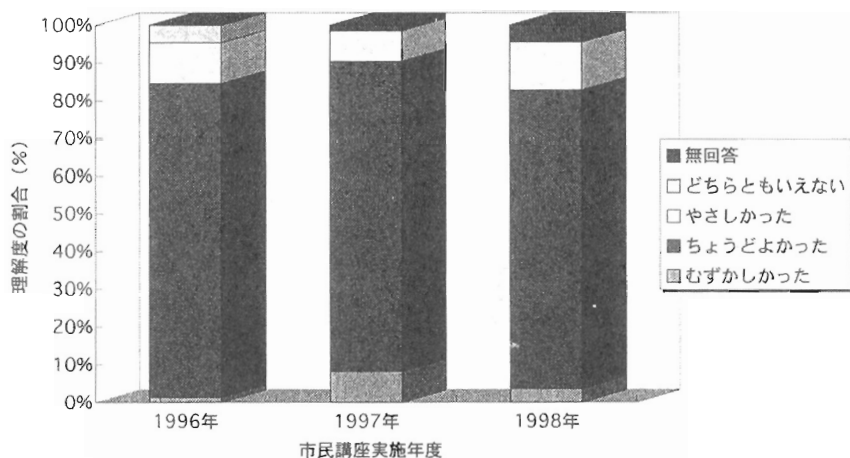


図15. 市民教養講座の理解度

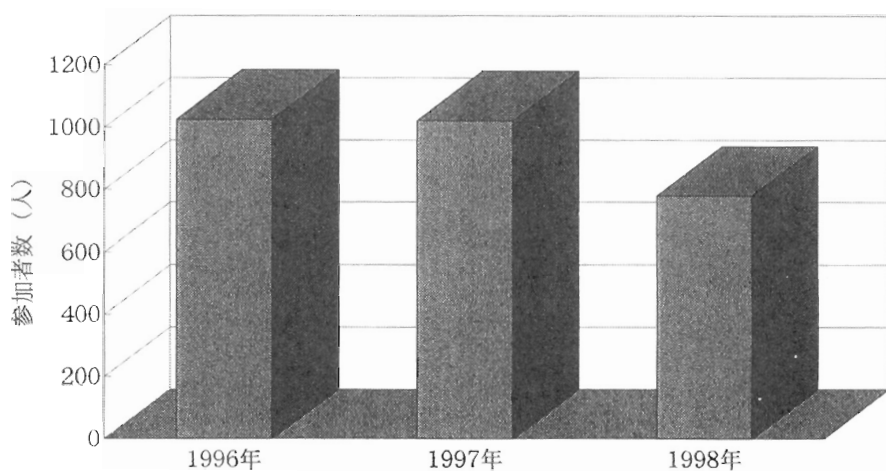


図16. 全講座の合計参加者数変動

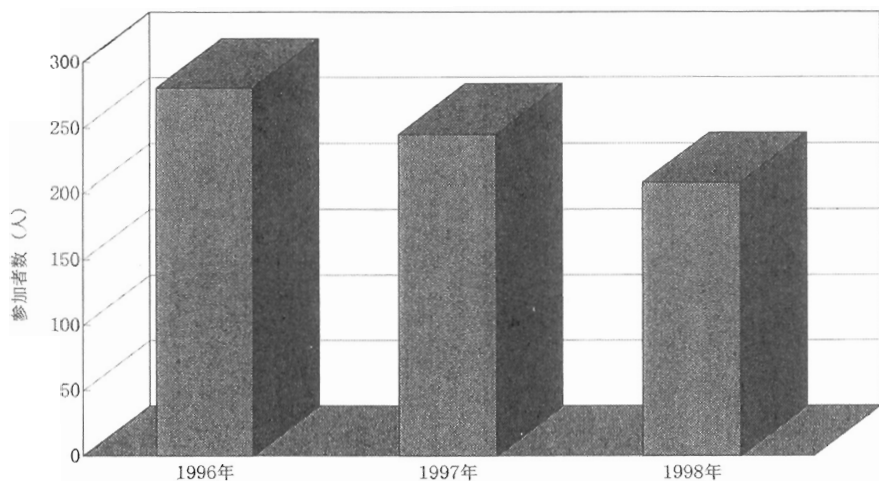


図17. 保健体育講座参加者数の変動

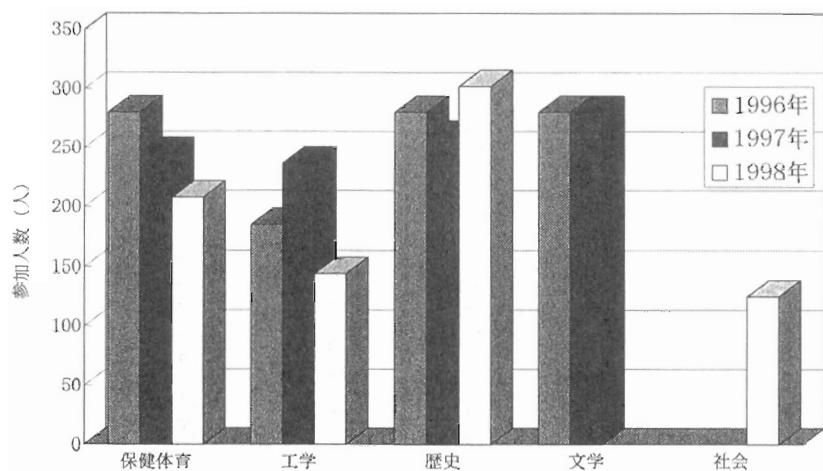


図18. 全講座参加人数の変動

上回る人数で人気講座であることが示された。文学の部に関する講座への参加者数は、1996年280人、1997年280人と同数であったが、1998年度は秋期から春期へと移行したため、秋期の同時期に実施されず、代わりに社会の部に関する講座が春期から入れ替わって加わり、その参加者数125人であった。保健・体育への参加人数の全体に占める割合は、1996年280人、1997年245人、1998年208人となり、3年間の平均は244.3人、標準偏差は36.0人である。募集人数の合計は800人であるとすれば、ほぼ募集人数の目標数は確保していると考えられる。25.9±1.8%で、常に四分の一の人数を確保していることが認められる。

1. その他（保健・体育コース参加者アンケート記載事項）

アンケートによる個人記載を紹介する。ここでの記載は、各個人の忌憚のない自由意見である。少数ではあるが、記載のまま列挙する。

《1996年参加動機》

その他の内訳：健康増進の参考のため。市報をみて興味をもった。第1コースに出席しているので。木曜コースのみしか、受講できない。一番関心があって、気を張らずに参加できる。年齢的に健康に関心を払うべきだと思う。

《1996年情報入手方法》

その他の内訳：チラシ。関西大学通信。

《1996年今後の生かし方》

その他の内訳：実生活上、参考にしたい。知識として身に付け、これからの日常生活に役立てたい。実行を心掛けたいと思う。自分自身の健康管理にします。生活を考え直し健康に気をつけたい。

《1996年満足度》

受講対象者の範囲（例。中高年齢者）をしぼって参考資料を作成・配布し、日常生活の中に活かせる工夫が欲しい。簡単な実技指導があっても良かったのではないのでしょうか。既に、足・腰等（他も）弱っている人がとるべき方法があったらと思います。

《1996年希望するテーマ》

医学的な講座。実際に体を動かすような講座。具体的な心臓・腎臓・肺疾患の対応、食事療法等について。運動等についてももう少し詳しく知りたい。コミュニティについて。老化の防止の方策心理的な面、鬱病、痴呆。薬害に対する知識等。食事内容と健康、たとえば塩分摂取量の目安など。脳生理の仕組みと活性化を科学的に。健康によい食物が市場に多く出ていますが本物か。食物と健康について。ガンについてのテーマが聞きたい。健康維持について。糖尿病の治療方法。高齢者向けの新しいスポーツの紹介。社会保険制度。食事について栄養士の話。もう少し専門用語的な言葉（病名など）。更年期における体と心の変化。疾患別の食事療法。実技をもっと取り入れる。老人介護問題。ウォーキングコースや山歩きコースの紹介。若さ保持の社交ダンス。医療に関するテーマを取り上げた講座（脳血管障害、薬害、ガン、糖尿病）。実技を導入した講座（高齢者向けスポーツ、ウォーキング、社交ダンス）。食生活に関する講座（食事療法、食事と健康、診療内科領域（鬱病、痴呆）。生理学領域（脳神経系）。更年期障害。健康。社会保険制度。老人介護。コミュニティ。

《1996年今後希望する講座》

自然観察に関するもの。栄養学に関するもの。余暇の上手な過ごし方。地域との関わり方。肺ガンに関する知識。環境問題について。価値観の多様性に伴う中高年の対応。痴呆防止の体型的な知識。老後の生活を豊かにする内容の話。吹田地域の古代から現代までの歴史。吹田市の歴史と発展。日本語、文章作法。考古学。俳句・短歌。文学にみる歴史や作家。古典文学（源氏物語や徒然草など）。日常生活と住宅に関するもの。高齢化社会。時事解説、情報社会。近代から現代への歴史。美術関係。日本の歴史と世界史の関連講義。心理学。心の問題。株式の運営方法。生命保険。宇宙工学。ボランティア。

《1996年講座に関する意見、希望》

大学を知らない者が大学の講座を体験できる。健康に関するテーマは理解しやすいから良い。第1希望が抽選ではずれ、第2希望にまわされた。年3回の開講はできないものか。内容をよりわかりやすく。このような講座を継続してほしい。ユーモアを含んだ講義内容は好評。質問する時間を設けてほしい。内容

に満足している。2コースだけしか受講できないのが残念、全コースを受けたい。診療内科的健康へのアプローチを考えてほしい。他の講座も受講してみたい。震災後転居して吹田の歴史を知りたいと考えている。たいへん参考になった。このような講座をずっと継続してほしい。テキスト以外にも多くの資料を用意してもらえてわかりやすかった。生涯教育としてテーマを問わずたくさん開講してほしい。眠くなるので室温を少し下げてほしい。他ではこのような講座が無いので、できるだけ多く開講してほしい。

《1997年参加動機》

その他の内訳：生活習慣病に関する知識を得たいと考えた。不整脈とペースメーカーに関する知識を得たいと考えた。社会との接点が少なくなってくる年代で、前向きな生活活力をえるために。退職し時間的ゆとりができたから。身近な問題の知識を習得するため。大学生の子供と話題を共有しようと。今後の生活に役立てようと。健康増進の参考のため。実技を受けてみようと考えて。

《1997年情報入手方法》

その他の内訳：ケーブルテレビ

《1997年今後の生かし方》

その他の内訳：自分や家族の健康管理に生かしたい。日常生活で実践してみたい。知識として身に付け、これからの日常生活に役立てたい。健康維持に役立てたい。

《1997年満足度》

たいへん有意義な講座。講師陣の熱心な講義に満足。ボール運動はきつかったが、普段使っていない筋肉が理解でき、日常生活に応用したい。内容のレベルを上げてほしい。知識を得ることができ満足。実技を導入することはどんどん取り入れてほしい。ストレッチを生活で生かしたい。新しい分野のテーマに充実感を得ることができた。時間的余裕が無い。新聞やテレビでの知識を確認でき、より理解を深めることができた。

《1997年今後希望する講座》

日本の宗教の成り立ち。介護関連。痴呆症。哲学。宗教（キリスト教と仏教の

相違など）。古典文学（源氏物語、万葉集など）。幽玄の世界（禅や能など）。こころ。健康問題（不整脈の原因など）。保険会社の組織と運営。日本の政治と今後の在り方。植物の生理と分類。日本の古典芸能。天文学（最近の話題など）。環境問題。福祉問題。国際交流。文学。陶芸。歴史。スポーツ。レクリエーション。健康増進。考古学（最近の話題など）。経済（金融、ビッグバンなどの今後）。吹田の歴史、風俗、習慣、方言など。社会心理学（対人関係）。地球環境と生態学。健康と医療問題。初歩のパソコン講座。短歌・和歌。初歩の英会話。情報処理。天文学。健康診断の検査結果の解釈。行政改革（金融、郵政三事業など）。ストレス。心理学。古墳や社寺仏閣のフィールドワーク。漢方薬と健康食品。長期の講座で近・現代史。

《1997年講座を関西大学に移したことについて》

自然豊かなキャンパス、清潔な施設で楽しく受講できた。若さを感じ、若返ることができた。大学施設での受講は学習意欲をより喚起することができる。大学の経験の無いものにとって大学内に入れることは素晴らしい体験であった。親として同年代の学生達の生活が理解でき、講座が待ち遠しかった。学生や大学施設を肌で感じることができ気持ちの持ちようが違った、今後もぜひ継続を。市の出張所や銀行、郵便局が利用できる南千里のほうが便利でよい。大学会場を提供する場合、蒐集資料の解説や研究室の見学を取り入れてほしい。体育館やグラウンドの施設が素晴らしい。学生時代に戻ったような緊張感を感じ良い体験ができた。南千里の市民ホールのほうが話が聞きやすい。大学まで来る体力のない人のために、各地区で開催してほしい。関西大学の図書館を利用できるようにしてほしい。学生食堂で学生と食事をするのが満足。駅からも近く大学内の環境もよく満足。トイレが少ないのではないかと。OHP、スライドがやや見にくかった。博物館も見学でき満足であるが、図書館も利用したい。昼休みの大学内の散策が満足。若い学生とのふれあいは大いに刺激され、啓発されるものがある。関西大学での開講に満足。学習の場として最高の場所である。新旧の学生時代を考えながら受講でき満足。関西大学もよいし、メイシアターもよい。実技を取り入れるのであれば関西大学がよい。道路や食堂の混雑を考

えれば、南千里の市民センターがよい。などの意見が揚げられている。

4. 他大学における公開講座開講の状況

公開講座という名称で行われているものは各大学無数にあり、専門雑誌にまで掲載されており、私立大学、国立大学こぞって実施している。ここでは国立大学を中心に、特に体育に力を発揮している関係諸機関の一部分について紹介する。

【大学単独で開講】

鹿屋体育大学（平成9年度）スポーツ傷害保険料として50円を徴収《健康教育に関するもの》たのしいダンベル体操。腰痛・関節症者のための水泳教室。からだと心の健康講座。体と心にエアロビクス教室。関節リュウマチ症者のための水中運動教室。《スポーツ技術に関するもの》楽しいフットサル・クリニック。体操競技入門。楽しい体操教室（春期）。楽しい体操教室（秋期）。市民のためのテニス教室（初級者編）。市民のためのテニス教室（中級者編）。バスケットボール・コーチ・クリニック（春期）。バスケットボール・コーチ・クリニック（秋期）。バスケットボール・サマー・キャンプ（女子）。バスケットボール・サマー・キャンプ（男子）。剣道指導者養成講座。バスケットボール・レフリー・クリニック。ゴルフ初級講座。器械運動指導者研修。ウインター・スポーツ教室－スキー編－。親と子のラグビー教室。ゴルフ・練習場からミニコースへ。《レジャー・生涯学習に関するもの》市民のための海洋スポーツ入門。親子海洋スポーツ入門。たのしいスキダイビング。海洋スポーツ指導者養成講習会。少年少女のための海洋スポーツ教室。Practical Japanese for Beginners すぐに役立つ初級日本語。女性のためのパソコン教室－ウインドウズ入門－。生涯スポーツ教室。アメリカ文化論。Living English。以上合計32講座を開講している。募集人数の合計は841名、実際の参加者数は698名であった。体育系単科大学としては開講講座数が多く内容も豊富である。地域に存在する大学として大学の地域住民への開放を考え、量から質への転換を考えているようである。

長野県短期大学（平成10年度）：『健康を科学する』（8回，1500円，定員40名で19名参加）長野県短期大学の開放講座として長野市教育委員会との共催で，募集人数の合計は40名，実際の参加者数は32名であった。

信州大学（平成10年度）：『子どもキャンプ教室』20000円。信州大学教育学部が主催して，小学3・4年生を対象に4泊5日の戸隠キャンプ場でのキャンププログラムを実施。

清泉女学院短期大学（平成10年度）：『健康づくりーシェイプアップと体力づくりー』1000円。

筑波大学：体育センターが関連して講座を開催して，一般公開講座（平成6年11講座）と現職教育講座（平成6年4講座）を開講した。

【大学と市の共催】

東京都千代田区区民大学講座：9大学中2大学が年度をかえて担当する。平成10年度は，『明るく健康な日々のために一成人病の予防と対策』（日本大学，54名参加），『性・ジェンダー・家族』（専修大学，61名参加）で開講された。健康やスポーツ関連の講座は平成9年の『平成健康ゼミナール』（明治大学5回，113名参加）と『明るく健康な日々のために一成人病の予防と対策』（日本大学，54名参加）の2講座だけである。

愛媛県コミュニティーカレッジ：健康医学講座。12回土曜日13：30～15：30（定員30人，無料）。教養コースとして愛媛県が主催して開講，人生80年時代を迎え，すべての人が生涯を通じて健やかに暮らしていくための，総合的な心身の健康と生活について学習する。明日への健康づくり，メンタルヘルス，ストレスの仕組とその対応，健康運動とスポーツ，食生活と健康運動の実際，生活習慣病の知識と予防，健康管理Q&A，感染症の現況とその戦い，東洋医学を探る，痛みと漢方薬，環境生態系の再生，医の倫理と未来の内容で開講，指導者は大学および県関連研究機関の関係者。スポーツ・レクリエーション講座。8回土曜日13：30～15：30（定員30人，無料）。老若男女が気軽に行える多様なスポーツ・レクリエーションに触れ，健康の増進とコミュニケーションづくりに役立てる。レクリエーションゲーム&リフレッシュ体操，ウォーキング，

社交ダンス・，社交ダンス・，やさしいジャズ体操，やさしいダンス&日本民踊，初めての気功，楽しいパーティーゲームの内容で開講，指導者は大学教員で行われていない。

松山市民健康講座：3回木曜日19：00～20：30（定員300名，無料）平成10年度113名参加。難聴について，中高年齢者と貧血，脳動脈瘤の内容で開講。松山生涯学習振興財団が主催し松山市医師会が後援している。講師は医師会メンバーの医師である。

国立大学等・関係諸機関における公開講座の状況を大学単独開講と市との共催に2分して紹介したが，実施に際してのプランや内容において，非常に多方面にわたり考えられており，地域に存在する国立大学の地域住民に対する心配りが理解できる。予算面においては，現在の地方財政状況下では，無料での公開は困難になりつつある。吹田市民大学教養講座も現在のところ無料で，参加者の負担はない。内容の面で健康，運動，文化を考える幅の広さは国立大学が充実している。しかし，吹田市民大学教養講座は，実技と講座を調和した点，大学教員と保健管理センター医師の協力体制，学生達のボランティア参加，場所が一部分大学である，実技においても既存競技種目スポーツに固守するのではなく，あくまでも「気づき」を理念において実施している。このことは，施策の側面にまで拡大している。関西大学体育学教室および，体育課（体育事務局）は，「生涯スポーツ研究ステーション化計画」（日本私立学校振興，共済事業団の私立大学等1999年特色ある教育研究の推進計画書）を提案し補助金を獲得した経緯もこの吹田市民大学教養講座（保健・体育コース）や市民公開講座が基盤の一つになっている。

II. 生涯スポーツ時代のスポーツ

1. 現代スポーツの社会的背景

現代社会において，スポーツを日常的に親しむ人々が増加しつつある背景には，それなりの社会的要因がはたらいていると考えるのが妥当である。今日の生活は，近代科学文明の功罪にいやおうなしに操られてしまっている。すなわ

ち、現代人の生活環境と生活様式は、大きく変容させられているのである。

科学技術革新による産業高度化は労働時間の質と量を変化させ、一方では、労働時間の短縮、週休2日制は約70%にも達している事象からもみられるように³⁾、社会的文化的（自由に活動できうる）時間に費やす時間を大幅に増加させ、スポーツを行うための時間的条件をも整えている。他方では、単純単調な機械操作というような作業態様が主となるとともに労働管理機構が合理化され労働環境における精神的疲労の慢性化や運動不足化を推進してしまうが⁴⁾故にそこには、必要としてのスポーツや運動というものが見直される。

また、高度産業社会化は結果として人口都市集中化をもたらし⁵⁾、新しいコミュニティの形を求める。都市公害や産業公害の拡散は、人間の社会的・身体的健康を著しく脅かしている。人間にとってのスポーツは、そのような社会的背景との関わりを深めながら、必要性和可能性をも増大させ、新しいスポーツ観と行動様式を求めるようになってきていると考えられる⁶⁾。今日のスポーツは、①自由時間における自ら求め楽しめる活動であり、自己目的的活動。②運動不足やストレスに起因する疾病の予防、克服、健康体力の増進のための必要な運動としての手段的活動という2つの観点から実践され、現代的意義も承認されてきている。このような観点の特徴は、高度産業社会を経験した国々の共通した現象でもある。

ヨーロッパにおける「スポーツ・フォア・オール憲章」では、自己目的的活動である本質側面と手段的活動である機能側面を包括した形でとらえ①競技スポーツ②野外スポーツ③表現スポーツ④身体機能調整運動の4つのカテゴリーでおさえている。①競技スポーツの語源は、ラテン語「deportare」と言われ、もともとの意味は「真面目なこと（仕事）から離れ、非日常的な次元で遊び戯れること」であった。その後、古代フランス語「deporter,desporte」、中世英語「disporte」を経て16～17世紀に「sport」と言う語が誕生した。それは、しばしば娯楽「pastime」やレクリエーションと同義に使われ、活動、性格においても、今日のスポーツとは、異なったものであった⁷⁾。

スポーツが今日のように競争的な身体活動の意味に用いられるようになった

のは、産業革命を経て誕生した近代社会になってからのことである。

アレン・グートマン (Allen Guttmann) は、競技スポーツの特徴を世俗可、平等化、専門化、合理化、官僚化、数量化、記録化と言うものを持つとしている。また、ジレ (B.Gillet) は、遊戯、闘争、激しい肉体活動と言う三要素を含む活動であると定義しエドワーズ (H.Edwards) に至っては、遊戯とは接点をもたないとまで限定している⁸⁾。

勝敗を考えたスポーツ現場の指導では、経験と勘が中心となり、合理性より根性が優先され、人間関係においては、年功序列が優先されてきた歴史的事実がある。しかし、1980年代後半から競技スポーツの世界では、情報・ハイテク化が急速な発展を遂げスポーツ科学による研究は、テクノロジーの発達と情報化の進歩により「情報を制する国が世界を制する」とまで言われ国際化を果たした。すなわち、一定のルールに基づく競争を特徴とする。②野外スポーツは野山河川など自然的環境に親しみ挑戦し克服することに喜びを求める活動である。③表現スポーツは、ダンス、リズム運動、など身体運動による表現や感覚的喜びを求める活動。④身体機能調整運動は、身体のコンディションを整えるための身体活動であり、必要な運動として身体に直結するものでもある。プレー要素基盤とするスポーツ論には、馴染まない点もあるが、現代社会の生活環境、生活様式の急速かつ大きな変化がもたらした健康阻害を含む人間疎外状況との関わりを重視したカテゴリーとして注目すべきである。わが国においても、まったく同様の形でスポーツをとらえ「みんなのスポーツ」を推進されているところである。

2. スポーツと生涯学習社会

①生涯教育 (life-long education) ・生涯学習 (life-long learning) におけるスポーツ

『教育とは、学校を卒業したからといって終了するものではなく、生涯を通して続くものである』として、ポール・ラングランは、1965年の第3回ユネスコ成人教育推進国際委員会において、生涯教育を提唱した。これまでの教育は、

学校教育・社会教育・職業教育などの各領域ごとに、また青年教育・成人教育など人生の各時期ごとに区別して追究されてきたきらいがある。ラングランは、このような傾向を批判して、人の教育活動は、一生を通じて継続的に行われるものであり、その領域は、生活全体に及んでいると主張する。生涯教育論は、従来の学歴社会の弊害を取り払い、学校・家庭・地域の結び付きを求める総合的な教育体制を提唱するものとして、各国から注目された。この生涯教育が求められるようになった理由は、ラングランが指摘しているように、①社会の諸変化の急速化、②人口の増加と平均寿命の伸長、③科学・技術の急速な進歩、④国民のすべてが政治的により高度の能力を求められるようになったこと、⑤情報の国際化、⑥余暇の増大、⑦生活様式や人間関係の変化、⑧身体（肉体と魂の関係）についての考え方の変化、⑨イデオロギーの危機、などに対応するための能力の育成が国民すべてにとって必要になったためである。それを人生の初めの方の学校教育だけでは果たすことは不可能であり、生涯にわたって学習の機会を手に入れられるような制度が求められたのである⁹⁾。教育は、初等・中等・高等機関において行われ、卒業後は社会人として、労働に従事し社会生活を営むものという考え方が一般的であった。しかし、学ばなければならない新しい知識や技術が次々と生まれようになった。人生80年という時代を迎え、高齢者の志向のひとつの特徴は、知識や教養であり、¹⁰⁾ 学習意欲やスポーツ活動を受け入れるためには、40代や50代の中年期における退職前学習（pre-retirement learning）の重要性が指摘される¹¹⁾。

そのためには、学校制度だけでなく、社会教育機関をも一体化して再編成することが不可欠である。そこには、社会人の学習欲求に応えられるような学習システムの整備が重要となる。生涯教育（life-long education）は「生涯学習のために、自ら教育機関を相互の関連性を考慮しつつ総合的に・充実しようとする」とされている。すなわち、学習機会を整備・供給する側の概念といえる。

これに対して生涯学習（life-long learning）は、「学習は自由な意志に基づいて、自分に合った手段や方法によって行われ、生涯を通して行うもの」という考え方に準拠している。つまり、学習者の立場からの概念である。

ポール・ラングランによって提唱された生涯教育の課題として体育・スポーツや余暇などが取り上げられ、このことによってその重要性が増し、生涯スポーツという形で実現したのである。ポール・ラングラン著「生涯教育入門」(1970年)の中ですでに「身体活動ないしはスポーツ活動は、一生を通じてほんの短期間においてのみ行われるという考え方を捨てなければならない。」スポーツを単に筋肉活動だけに限らず、他の文化から独立させることなく、あらゆる人々の知的・道徳的・芸術的・社会的・市民的活動と結びつけ、スポーツと生涯教育全体を統合しなければならない。」「身体的文盲と戦うことが、実は生涯教育の主たる目標の一つである」と指摘している¹²⁾。

我が国にもこの考えは、早くから紹介され、生涯教育に付随した形は、1960年後半「スポーツ・フオー・オール」を「みんなのスポーツ」と呼び、その振興が図られてきたが、歴史的には「社会体育」、「コミュニティ・スポーツ」などの宣伝等を徐々に浸透させるような形で展開してきている。公的には、生涯スポーツに先立つ生涯教育論の展開は、1971年の社会教育審議会答申「急激な社会構造の変化に対処する社会教育の在り方について」¹³⁾ 中で初めて生涯教育論が注目され、1981年の中央教育審議会の「生涯教育について」¹⁴⁾ 答申、1986年の臨時教育審議会答申「生涯学習体系への移行について」¹⁵⁾ と続き拡大され、ますます強化されるのである。生涯教育と共に生涯スポーツの振興、教育・研究・スポーツ・文化事業を支援のための制度の整備、施設整備等も取り上げられ、生涯スポーツが定着してきたのである。

行政面では、文部省の保健体育審議会が、1972年「体育・スポーツの普及復興に関する基本方策」の答申で、生涯スポーツ推進への基本的方向と機運を醸成した。1977年と現行の学習指導要領の改訂では、「生涯スポーツにつなぐ学校教育の在り方、授業の進め方」が中心的課題となり、1989年の保健体育審議会答申「21世紀に向けたスポーツの振興方策」の中でも「生涯スポーツの充実」が中心になっている。臨時教育審議会の最終答申以来、生涯学習、生涯スポーツは学校教育、社会教育両領域にわたり多用されるようになり、地域での「生涯学習スポーツ基盤」「生涯学習スポーツ環境」の総合的な整備充実が施

表2. 我が国における生涯スポーツの展開

年	時 代	事 項
1949	社会 体育 時代	社会教育法公布
1957		「地方スポーツの振興について」通達。2万人の体育指導員委嘱
1961		スポーツ振興法公布
1964		第18回オリンピック東京大会開催
1965		体力づくり国民会議発足
1972	ス コ ミ ュ ニ テ ィ 時 代	保体審「体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について」答申
1974		コミュニティ・スポーツの振興が各省庁で強調される
1975		派遣スポーツ主事制度発足
1981		中教審「生涯教育について」答申
1986		保体審「社会体育指導者の資格付与制度案」発表
1987	／ 生 涯 ス ポ ー ツ 時 代	臨教審「生涯学習体系への移行」発表
1988		文部省機構改革
1989		第1回全国スポーツ・レクリエーション祭開催
1989		保体審「21世紀に向けたスポーツの振興方策について」答申
1990		生涯学習の振興のための施策の推進体制の整備に関する法律公布
1992		学校週5日制度スタート

策課題となる。1988年、文部省に、「生涯学習局」、体育局には、「生涯スポーツ課」を成立に到った。このように種々の生涯学習政策の展開に伴って、生涯スポーツは、急速に定着し始めたのである。

それ以前では、同類似の用語として用いられてきた。しかし、各々若干の定義が異なり、それらが目指す時代のスポーツ現象に大きな相違と特徴が見られる。1949年の社会教育法制定以降、1965年までの「社会教育時代」、その後1975年までの「コミュニティ・スポーツ時代」、それ以降の「生涯スポーツ時代」といったように、3期に区分できる（表2）。

②生涯スポーツ（Lifelong integrated sport）

アメリカやカナダの北米において、生涯スポーツの取り組みはかなり早く行われてきたが、その中心はヨーロッパからのスタートであった。イギリス、ド

表3. スポーツ・フオー・オールの歴史的発達過程

1960	：西ドイツ「ゴールドンプラン」「第2の道」のスタート
1960	：イギリス「ウォルフエンデン・リポート」〔スポーツとコミュニティ〕
1964	：ヨーロッパ評議会〔CE〕がスポーツ・フオー・オール概念と方針の採用
1965	：ノルウェー スポーツ・フオー・オール計画発表
1969	：第1回国際トリム・フィットネス会議
1970	：西ドイツ トリム運動のスタート
1975	：ヨーロッパ評議会〔CE〕が欧州スポーツ・フオー・オール憲章を採択
1978	：ユネスコ総会「体育・スポーツ憲章」第2条「体育・スポーツは、全教育体系 の中で生涯教育の不可欠の要素を構成する」
1987	：文部省体育局スポーツ課が機構改革し、生涯スポーツ課と競技スポーツ課へ
1989	：日本体育協会からJOCが分離独立
1991	：国際トリム・フィットネス・生涯スポーツ協議会〔TAFISA〕の設立
1992	：ヨーロッパ評議会が「ヨーロッパ・スポーツ憲章」の採択
1992	：「日本トリム・フィットネス生涯スポーツ協議会」〔TAFISA-Japan〕の設立

イツ、北欧諸国の生涯スポーツの展開は、1950年各々の国ごとに活動し始めた。1960年代、イギリスの「スポーツ・フオー・オール運動」やドイツの「トリム運動」、スウェーデンの「KOM運動」などが上げられる。これらの運動はいずれも、産業化や高齢化を含む近年の社会全体の変化への対応という時代背景の中から生まれたものである。すなわち、健康危機や運動不足への対処、自由時間の増加への対応、また、高騰する医療費の抑制という問題を解決するためのスポーツや運動としての見直し政策として展開してきたのである。

我が国でいう「生涯スポーツ」は国際的には、「スポーツ・フオー・オール」と呼ばれ、すべての人に、スポーツを楽しむ機会と環境を整備しようというものである。スポーツをエリート選手だけの独占ではなく、人類固有の文化として振興しようとするものである。この「スポーツ・フオー・オール」のコンセプトは、1975年開催の欧州（EC）のスポーツ担当大臣会議において採択勧告が行われ、全世界へと広がりを増していくのである。表3.は、このスポーツ・フオー・オールの歴史的発展を示している。このような歴史的段階を踏んで成長した生涯スポーツは、現在、個人の立場からは身体活動やスポーツ活動を、生涯の各時期での生活の一要素として位置づけ、より健康で、より

豊かな生活を築き上げるために行われるスポーツ活動をいう。一方、社会の立場からは、人々がその生涯の各時期、生活の各分野で、必要に応じていつでも身体活動やスポーツ活動を学んだり、自ら進んで実践できるような多様な学習機会や文化的環境を整備することなどがあげられる。

我が国でも、経済優先の社会から生活優先の社会へと大きく方向転換を迫られている最近の社会情勢から、行政関係をはじめ、民間団体も生涯スポーツの普及振興に積極的に取り組む機運にある。特に、文部省保健体育審議会の「体育・スポーツの普及振興に関する基本方策について」の答申が出された1972年ごろから生涯スポーツへの機運が醸成され、70年代の後半から、そのための本格的な指導書が出始めた。

今日では、人々の生活福祉の立場から、スポーツやレクリエーション関係に関連予算を計上している関係省庁は、従来の文部省以外に、総務庁、経済企画庁、環境庁、厚生省、社会保険庁、農林水産省、運輸省、郵政省、労働省、建設省、自治省など13省庁に及び、スポーツ省の設置が考えられる時代に突入したと言える。また、総理大臣の諮問機関である臨時教育審議会の87年答申には、特に、生涯学習体系への移行が強調され、これを受けて88年に、文部省内に新に生涯学習局や体育局に生涯スポーツ課が設置された。生涯スポーツと言うものが一挙に本格化した時代と言える。表4. は、わが国の生涯スポーツ・レクリエーション関連経費を示している。各省庁の力の入れかたが注目される。

生涯スポーツ時代は、これまでの対処療法的、楽観主義的あるいは行政指導型的なスポーツの反省にたち、さらには第三の教育改革と言われる教育全般の見直しのなかで、真に主体的なスポーツの展開とそのための生活福祉の立場から行政的支援が求められる。

③. 生涯スポーツの概念と定義

本格的な生涯スポーツ論は、せいぜい20年程度の歴史的背景しかない。ボール・ラングランの生涯教育論の考えを生涯スポーツ論にあてはめて考えれば、その基調は生涯スポーツが単なるLife-Long Sportではなく、Life-Long Inte-

表4. 我が国の生涯スポーツ・レクリエーション関連経費 (単位: 万円)

省 庁	主 な 事 業 内 容	経 費
総 務 庁	国民健康体力づくり関連事業費	約 2 億3,000
経済企画庁	余暇行政の調査, 調整関連費	2,300
環 境 庁	自然公園等施設整備費	29億5,000
文 部 省	体育, スポーツ施設の整備, 指導者養成 団体助成, 地方スポーツ振興事業等	290億0,000
環 境 庁	保健衛生施設, 児童厚生施設, 婦人健康づくり 老人保健, 高齢者の生きがいと健康づくり等	604億5,000
社会保険庁	職域における健康管理事業, 健康づくり啓蒙普及費	341億0,000
農林水産省	森林レクリエーション事業等	12億1,200
通商産業省	余暇関連産業調査費, 小規模事業者等健康維持増進支援事業	1億0,600
運 輸 省	観光レクリエーション地区の整備	2億2,000
郵 政 省	簡易保険, 郵便年金レクリエーション施設, 郵便貯金リゾート施設の整備	54億3,000
労 働 省	勤労者体育施設, 働く婦人の家, 青少年ホーム整備 労働者健康確保事業育成費	89億6,000
建 設 省	国営公園, 都市公園の整備, 大規模自転車道の整備	1123億7,000
自 治 省	厚生福祉施設整備事業債 (地方公共団体に対する政府資金の貸付)	1270億0,000
国の生活スポーツ・レクリエーション関連経費の総額		3820億5,000

資料: 体力づくり国民会議事務局 総務庁青少年対策本部: 「国民の健康・体力づくりの現状」

grated Sportであるということで, 次の三次元の統合が強調しているところに特徴がある。

①垂直的・時間的統合として, ライフサイクルの全体を通じて実施されること。②水平的・空間的統合として学校教育と学校外教育, 家庭, 職場, 学校, 地域社会のそれぞれでスポーツが実施され, 他の社会的・文化的活動との関連で実施されること。③立体的統合として垂直的統合と水平的統合を踏まえ, 完全な人間の形成と自己現実のために質すること¹⁵⁾。そこでスポーツは, 競技スポーツ, 健康のためのスポーツ, 楽しみのためのスポーツにとどまることなく, 人生各期の発達課題解決に役立つ価値志向的スポーツ活動, そして, 生活内容,

生活行為そのものとして営まれる社会的・地域的に開かれた活動としてのスポーツでなければならない。

一方、Life-LongのLifeは、①生命科学（Life Science）の生命と同意と考え、健康維持のための長生き教育、②生活の意、Good Life, Way of Life Quality of Lifeという場合の生活（ライフ）、生活向上のための生涯スポーツ、③人生如何に生きべきか、という人生、生き甲斐としてのLife、生き甲斐生涯スポーツ、学ぶ楽しさ、出来る楽しさを得る生涯スポーツの3つの意味を統合する概念が必要とされる¹⁶⁾。

しかし、Quality of Lifeについては、具体的な構成要素に関する共通理解が得られていない。満足感、生き甲斐、幸福、生活、生存、寿命、生き方などを踏まえながら、身体的・精神的・社会的欲求の充足度として理解し、それらを全体的な視点から把握する必要がある。

④. 生涯スポーツの意義とライフスタイル

日常的スポーツを誰もが行うと言う前提たって考えた場合においては、子供から高齢者および障害者までも含めたスポーツを考えなければならない。子供から高齢者になる過程における各ライフスタイルによって年齢、体力、ライフスタイルに適合した運動やスポーツを楽しみながら、継続することにあると考えられる。そこには、前述のごとく競技スポーツのような記録や勝敗は無くプレーや触れ合いを楽しむ事が大切なのである。結果に拘らないでプレーや仲間との触れ合いを重視することにより、結果として健康に良い影響を及ぼすものである。楽しみながら継続出来たときスポーツは、ライフスタイルの一部となり、はじめて文化生活と呼ばれるようになるのである。

先進諸国では、人々の意識や価値観、生活心情が産業社会の「モノ」重視から、「生活」「健康」「心（ホンモノ、自分らしさ）」重視へと変わってきた。特に若者を中心にこれらの価値を重視するライフスタイルが確立されつつある。今日のジョギングやスイミング、アスレチックなどのスポーツブーム、健康ブーム、温泉ブーム、またグルメ志向などがその例である。また一方では、国も

脱産業化社会を生涯学習社会と位置づけ、そのなかで、地域再編成、医療費抑制、福祉などの政策課題を解決する一つの方法としてスポーツに期待しているようである。

生涯スポーツの振興に当たっては、「スポーツ宣言」¹⁷⁾にもみられるようにスポーツをもっと幅広く解釈し、競技スポーツの範囲には入らない運動文化を含め考えを改める必要がある。こうした発想に転換にくわえて、スポーツに係わるインフラ（社会的条件）が整っていないわが国の場合、行政の果たすべき条件整備の責任は大きい。

とはいえ、生涯学習の基本何と言っても一人一人の主体的な学習への意欲である。行政の条件整備に励まされ、人々が生涯に渡って学習に取り組むと言うライフスタイルの確立していくことこそが、現在求められている生涯学習体系への移行の可能性をつくり出すものであることを十分に理解する必要がある。その際、「ライフスタイルは生きがい、または価値観を含む」¹⁸⁾ものであることから、年齢段階やライフスタイルによる価値観の違は避けられないことである。したがって人々の葛藤は当然存在するが、お互いに他者の生活を認め合う中でその解決ははからなければならない。しかも、生涯スポーツである以上、子供から老人まで、そして障害者も含めてスポーツを楽しむという視点を欠いた解決はありえないことは強調するまでもないことである。

⑤. ライフスタイルへの注目と自己責任論

ライフスタイルの変容を強調するあまり「自分の健康は自分で守れ」といった、健康の自己責任論に陥ってしまう危険性もある。健康についての個人責任主義的ないしは身辺処理主義的健康観にならないように配慮することが求められる。長時間かつ過密な労働を改善しないで、また、長時間通勤をなくす住宅問題を解決しないで十分な休息が確保できるであろうか。夫婦共働きの時代で加工食品が氾濫する中で有害な添加物の食品を避けることができるであろうか。都市での遊び場や公園の少ないなかで、子供から高齢者の運動不足を解消することができるであろうか。個人のライフスタイル自体がこうした社会環境の影

響を受ける事実から目を背けてはならないのである。生涯スポーツの主体はライフスタイルに影響を与える環境の改善、変革をも自らの課題として考える主体でなければならない。

⑥. 社会的概念と心の健康

健康を純粹に個人のレベルでとらえる認識は今日退けられているといえる。健康概念は社会的な概念としての広がりや内実をもって理解されようとしているのである。しかし、そうであるからといって人々の健康に関する意識が自動的に社会性を持つわけではない。なぜなら人々の健康の関心は、自らの身体や精神の健康を通して、それらに規定される自己の社会への係わりへの自覚をまっしてはじめて社会性を獲得すると考えられるからである。

つまりは健康（問題）への主体的な接近のあり様は、自らの健康を軸にして自分および自分の健康と社会との相互関連を自覚していく他はないといえる。したがって健康は社会的であるが、それへの接近は一人一人の健康への自覚を視座とすることによって効果的にアプローチすることが可能となる。個人の精神や身体健康は、主体の社会への健全な係わりとの関連で評価されるのである¹⁹⁾。

人間のライフ・ステージで体力が最も充実していると考えられる青年期（大学生）の場合、最高潮に達した体力をもつ青年は、スポーツで汗を流しながら老後を活動的に生きる水準にまで体力を高めるだけでなく、高められた体力が有する余力を健康な社会を構築していくエネルギーに昇華する機会を積極的に求める態度こそ必要なことであると考えられる。

⑦. 健康教育学論〔体育論〕

「幸福であると感じるかどうかは、障害がないという以外に、願望がはつきりと満たされているかどうかによる」とハンス・シェーフアーは、幸福であることは極めて主観的な性格を持っていると指摘している^{20, 21)}。健康であることは、病気でないということによってはまだ満たされることの無い課題である。

すなわち、健康であることは、経験と病気を除けば実現出来ないような生活態度によって獲得され維持されることを要することである。

現在では、健康は、幸福な生活に方向転換され日々簡単に手に入る消費財と思いがちである。しかし、このような「絶対的な健康の楽園」は、生全体に関わるものだという考えを無視している。健康な身体を実用的に理解する危険性が少ないことから、健康と健康であることの多層性は、スポーツ教育での健康教育の営みに対して強調されなければならない。そのことによって、病気から健康を消極的に限定する従来の試みは克服され、スポーツに適切な役割を認める個人にとって、展望が開かれるのである。

医療との係わりが最も重要視されつつある現在においては、心臓系、循環系の活性力、酸素摂取能力、骨格および筋肉器官、運動器官の作業能力と言った身体的複合的要素に関してのみ、そのつど客観的測定が行われている。職場においては、健康診断義務。学校においては、健康診断は基より体力診断テストや運動能力テストの実施が行われている。しかし、これらと結び付いている精神的、社会的状況は、数値的指標で示される客観的な統制から離れている。

健康概念は、個人の幸せな気持ちや個人能力や社会的な働きに基礎を置く考えが成り立つ。それゆえにスポーツ教育学的な帰結において、この健康というものが生み出されている。あるいは、損なっている生活状況を背景にして明らかになると考えられる。従って、健康教育の重要点は、実技・実習を中心とした授業において、目標として設定されなければならない。体育の科目名称が様々に変化されている今日においても、この目標は変わることはない。スポーツ授業（体育実技）の自立性は体育的な考えを可能な限り、そのまま表現することにあるのではなく、健康教育的な側面以外に、認知的、情緒的、社会的要素を養う教育の全体的構想に組み込むことにおいて、成立するのである。健康であることや健康を強めると言うことは、自己理解に影響を及ぼすだけでなく、精神的・心理的生活の枠条件を固め、これをそれなりの仕方で満たす人間学的な課題であると言える。身体的健康は、精神的健康の前提条件ではないが、しかし、精神的な生活を活気づけ、生きることへの渴望と信頼を与えることも事

実である。スポーツとスポーツ教育（体育実技）は、基本的生活の構成部分であり、人間的な機能と同じように生に基づいて理解され、解釈されなければならない。このことは、哲学や数学を営むことについても言えることである。それには、健康や病気でさえも、実存的な基本状態として数えられる。身体習練での喜びは、このような実存的な背景から切り放すことはできない。病気とか死とは、むしろ、そこから、はつらつと生きることの大事さも強く経験されるのである。生の冷厳な人間学的な極である。病気と死を顧慮して初めて、身体を習練し、生きることを保全するスポーツ活動のより深い意味が理解されるのである。

スポーツを営む人が、健康において、また人格の発展において占めている位置とそれに属していて、そのつど習練の過程が果たす潜在的な寄与を対象と考えるのではなく、対象について考えたものを思考するような理論的な態度で自覚して初めて、健康に関しての教育活動というものが教育全体、社会全体に対し果たす作用が期待できると考えられる。健康にとって様々なスポーツ活動が持つ意義の問題こそは、この関連の認識を通して自らの発展への責任感を目覚めさせるために、省察の対象にされなければならない。それには、もちろん様々な生活段階での、健康を保全するスポーツ活動に関しての展望が重要である。健康、フィットネス、ウェル・ビーイングと教育的に動機づけられた運動と遊戯によってそれらをバックアップすることは、人間存在の全体に関わっていて、人間学的に解釈することが必要な過程であると考ええる。

⑧. 今後の生涯スポーツの展開

ヨーロッパなどでは、地域に根ざしたスポーツクラブが国民スポーツの中心的役割を果たしている。我が国では、これまで学校や職場の運動部が大きな役割を果たしてきた。また、地域のスポーツクラブも、単一種目型、一定の年齢層の人だけの活動として行われてきた経緯がある。ここにきて、遅まきながら文部省は、地域スポーツを21世紀に向け「いつでも、誰でも、気楽に行える総合型地域スポーツクラブ」を打ち出してきている。ねらいは、少子高齢化社会

の進展、生活環境の利便化に伴う身体活動の不足、コミュニティ感情の希薄化などが指摘されている現代の問題点を解消し活力ある社会維持していくため、国民の主体的、継続性にスポーツに親しめる環境づくりを急務と考えたからである。そこには、こうした時代の要請に応えるものであり、生涯スポーツ社会を実現する上で極めて大きな役割を担うものである。我が国の既存の地域スポーツクラブは、ほとんどが単一種目のスポーツクラブであり、会員が固定的、ゲーム中心、拠点施設が無いという問題点があった。現在脚光を浴びている総合型スポーツクラブ構想とは、①地域住民が自主的運営、②拠点となる施設を持っている、③複数のスポーツ活動を実施、④有資格者のスポーツ指導者が配置されている。⑤青少年から高齢者に至るまで幅広い年齢層の参加、⑥地域住民の交流の場がある、等の特徴を持っている。このため、地域住民の健康・体力増進に資するだけでなく、スポーツの潜在人口の掘り起こし、豊かなコミュニティづくりに寄与出来ると考えられる。

一方、これら生涯スポーツ（地域スポーツ）の基礎となる教育は、新学習指導要領において「生涯スポーツへの志向」をスローガンに体育の授業を生涯スポーツに向けた準備機関と位置づけている。しかし、学校体系による縦次元「段階制」横次元の「系統性」、「接続（articulation）」、「統合（integratio）」が果たしてうまく機能しているかと言えば、いささか疑問が残る。

そこでは、運動文化に関する知識・理解や技能を系統的に学習し、習得することを極端までに軽視し、代わって、生涯スポーツに向けての「愛好度態度」、「楽しみ方」、「学び方」、「心構え」を学び取ることを重視する²²⁾。その結果、加熱なまでにスポーツ塾増大が出来てしまった経緯がある。そこには、家庭の経済力によって行ける者と行けない者を生み、体育学力における階層格差をもたらしている。また、反面そうした動向の中で、課外で文化的、自動的活動として行われるべきスポーツ活動が大人によって囲い込まれ、管理された教育活動になっていることも問題が残る²³⁾。

このようにみると、現代の日本社会は生涯スポーツ時代に確実に入っている。ゆえに学校教育（大学も含め）は、生涯スポーツに備えた準備教育とか社会に

における教育・文化・スポーツ産業が発展してきたのであるから官民が協力・分担・連携し、学校体育のスリム化というような安易な考え方は、教育機関と社会の関係を一面的理解しか捕らえていないとしか考えられない。

文化としてのスポーツと教育としての体育の関係が問われる時代に突入している。そこには、文化とスポーツの質を問いつつ体育の在るべき理想像を模索するという認識方法が求められる。今になって改めて「いまを生きる」が重要視される教育界であるが、体育という授業を越えたところでの人間の「生き方」を含めて、将来の予見する能力が、必要でありこういった能力の育成は、何にもまして社会科学的知見やその学習が必要と考えられる。今日の「生涯スポーツ」路線は、文化としての質が問われているといえる。21世紀に向けてこの「生涯スポーツ」がどのような方向に進んでいくのかは、私たち国民がスポーツに対する教養によって左右されると考えられる。膨大なスポーツ情報が入り乱れる中で、今日の「生涯スポーツ」を取り巻く問題を正しく分析し、「生涯スポーツ」をみんなの文化として、後世代に残せる文化とその質を見極めなければならない。そのためには、教育機関でのスポーツ国民的教養を身につけなければならない。その教養を身につけるために、スポーツ情報を選択出来る能力を身につけること、また「スポーツの意味」や「スポーツを歴史的座標軸で捉えること」、「スポーツを地球規模で捉える発想（地球環境問題）」、「スポーツの文化的共同性」などを学ぶことが重要である。

おわりに

『Ⅰ』では、本大学体育が地域に社会的に、「開かれた大学」理念に立って、吹田市民大学教養講座について取り上げた。『Ⅱ』においては、研究の課題意識に係わる生涯スポーツに関連する補論を取り上げた。そこで重要なのは、スポーツ振興における大学の貢献である。大学体育・スポーツは、本来的には、当該大学に属する学生を対象としての教育であるが、魅力ある大学として評価されるためには、スポーツ分野における多様な社会的貢献が、大きく期待される。生涯スポーツ分野においては、「開かれた大学」の理念に立って、公開講

座や講習会の開催等地域のスポーツクラブや一般住民への貢献が大きく期待される。とりわけ、理論的、実践的な力量を有している体育科教員の貢献、学生達によるスポーツボランティア活動等が、このような面で望まれるところである。さらには、各大学の状況によっては、大学施設を基盤とする学生と住民からなる新しいタイプの「総合型スポーツクラブ」、「調和的プログラム」などの構想も考えられる。また、大学等のスポーツ指導者養成を行う機関においては、今後、学校体育の教員のみならず、生涯スポーツの指導者の養成面でも貢献していくことが期待されている。このため生涯スポーツ指導者養成に、より重点を置く教育研究体制の整備が望まれており、その養成に当たっては、十分な人間性の涵養、各ライフステージの特性の理解と適切な対応能力、施設の管理運営能力等を養うための教育内容の充実が望まれる。

関西大学の体育学教室は、1982年から1999年、第11回から第28回の吹田市市民大学講座、保健・体育コースを17年間、保健管理センターの協力体制も得て実施してきた。

その歴史的背景の中から体育学教室は、本大学に属する学生を対象としての教育を考えるに当たって大きな変化を迎えている。その一つに公開授業があげられる。大学体育の授業展開にあたって生起する「付加価値」を重要視しようというものである。第1に「学生」にとっての付加価値である。自発的に分担して案内資料を作成したり。広報活動を行う。また、当日の受付業務など住民への参加呼びかけを通して、学生自身が大学の地域社会への解放と意味論をその分担者として自覚する。そこには、人間関係における責任の自覚。大人としての対応。人間教育学的学習。などが揚げられる。第2に「体育教育にとっての付加価値」である。実施計画や審議決定にいたる、全学的な認知の高揚やユニークな授業の開発に発展する可能性が高い。第3に「大学総体にとっての付加価値」である。開かれた大学構想にあって学生の参加に伴い、大学プロジェクトの推進に繋がるものである。第4に「体育研究にとっての付加価値」である。研究の視点が、付加価値追求という授業開発を検討することによる政策の側面にまで必然的に拡大している。たとえば、「生涯スポーツ研究ステーショ

ン化計画」(日本私立学校振興, 共済事業団の私立大学等1999年特色ある教育研究の推進計画書)であり, 研究成果の深化が考えられる。以上4つの観点が考えられるが, 現場では, 生身の人間同士のスキンシップがあり, そこには独自性の工夫により様々な付加価値が存在することは言うまでもない²⁴⁾。現在, 公開授業は, 「リズム体操指導法研究」(田村典子) 5年目, 「ジョギングを楽しもう会」(青木積之介) 1年目である。

ここで「公開授業」を取り上げたのは, 「吹田市民大学教養講」においても一部, 健康面での実技導入はもとより学生の参加が見られる点である。また, 2年生配当科目であるスポーツ研究である, 「リズム体操」, 「ジョギング」が公開授業として地域住民と学生を交えてのジョイントが成されている点などの経過を見るにつれ, 体育授業の在り方が進化してきている。

大学体育は, 基本的にこれら「生きる」, 「身体運動の文化」, 「気づき」などを教養の役割として改めて確認されなければならないと考える。また, 同時にこれらのことを含めた上での専門としての体育の改革や授業開発がなされなければならない。実習(実技)研究, 講義を含め「スキルの上達」, 「専門性だけの拡大」だけでは, これからの生涯学習・スポーツを切り拓く人間は育たないということを最後に強調しておきたい。

本論を作成するに当たり資料提供いただきました諸大学・諸機関(関西大学生涯教育課, 吹田市教育委員会。吹田市公民館, 鹿屋体育大学, 鹿屋市教育委員会, 筑波大学, 信州大学, 長野県短期大学, 長野県教育委員会, 東京都千代田区教育委員会, 清泉女学院短期大学, 愛媛大学, 愛媛県松山市教育委員会, 中京大学)また, 姫路獨協大学, 小田慶喜先生の御協力に対し関西大学を代表して, ここに深甚なる感謝の意を記載するものである。

【参考文献・註】

- 1) 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について, 「大学における体育・スポーツ」「地域社会におけるスポーツ」文部省, 保健体育審議会答申, 1996。
- 2) 「開かれた大学」関西大学百年史, 通史下巻, pp615～619,

1992.

- 3) 賃金労働時間制度調査, 労働省, 1975.
- 4) 労働者の健康状況調査, 労働省, 1975.
- 5) 国勢調査, 総理府, 1975.
- 6) 体力づくりトリム運動, 国民体力づくり事業協会, 1975.
- 7) 丸山富雄, 菅原 他: スポーツ社会学の基礎理論, 不味堂出版, 1984.
- 8) アレン・グートマン (清水哲夫訳): スポーツと現代アメリカ, B Sブリタニカ, 1981.
日本医師会編: 健康運動ガイドライン. 医学書院, 1994.
- 9) ポール・ラングラン著 (波多野完治訳): 生涯教育入門 (第一部) 全日本社会教育連合会, 1982.
- 10) 山田紘祥: レジャー・ニュートレンド, 日本能率協会, 1986.
- 11) 山口泰雄: 中高年のスポーツへの再社会化, 文部省科学研究費 研究成果報告書, 1994.
- 12) P. Lengrand: An Introduction to Lifelong Education, UNES CO. 1970. (波多野完治訳: 生涯教育入門, 全日本社会教育連合, pp75~77, 1971.)
- 13) 我が国で最初の生涯教育に関する答申, 「激しい社会変化に対処するためにも, また各人の能力を最大限に啓発するためにも, 生涯教育の観点に立って教育全体の在り方を検討していく必要がある」生涯教育を家庭教育・学校教育・社会教育の3者の有機的統合としてとらえることを提案, 1971.
- 14) 生涯教育がこの答申によって社会教育領域から教育界全体にかかわる問題としての位置づけがなされる。「生涯教育の意義, それに関する状況と今後の課題, 成人期の教育, 高齢期の教育」から成り, 全体的な生涯教育構想を示す。1981.
- 15) 多々納秀雄: 生涯スポーツとは何か, その本質を問う, 学校体育第15巻第12号, p 15, 1990.
- 16) 森 隆夫: 生涯教育とは何か, 明治図書, pp.57~58, 1981.
- 17) 『スポーツ宣言』ユネスコの下部組織である「体育・スポーツ国際会議」が1968年のメキシコオリンピック大会の前夜に採択したもので, スポーツの意義やその望ましいあり方について提言している。その中でスポーツを「プレイの特性を持ち, 自分自身や他人との競争, あるいは自然への挑戦を含むあらゆる身体活動」と定義している。
- 18) S.D.Feldman & G.W.Thielbar ed: Lifestyles in American Society, 2nd ed, Littler Brown & co, Boston 1-4, 1975.
- 19) 三浦敏弘, 市川哲: 大学生の健康・体力に関する保健体育学的研究, 明治鍼灸医学, 第4号, pp85-97. 1988.
- 20) Schaefer, H. (Hrsg): Der gesunde kranke mensch Dussldorf, 1980.
- 21) ヘルマン・ルールス (長谷川守男他訳): スポーツ教育学現実, ベースボールマガジン, 1990.
- 22) 海野勇三, 新学力観の批判的検討, 「体育実技に新しい風を」, 学校体育研究同志会編, 大修館書店, 1993.

- 23) 増山 均，子ども研究と社会教育，青木書店，1989.
- 24) 伴 義孝：大学体育の可能性を問う－付加価値追求型の授業開発に焦点を合わせて－，大学教育学第21回大会発表資料，1999.